昭和46年5月2日発行通巻8号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

5/2
220円
8

AE 朝日＝ラルース

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

刊行のことば

1970年代の世界は，科学技術の異常な進歩と豊かな経済発展をとげた半面，人間の幸福とは何かを，あらためて問い直すことを余儀なくされています。この地球上の自然は，現代文明の生んだ公害のために破壊されようとし，動植物はかれらの生息する環境を失いつつあります。動物の一員である人類の運命もまた，この自然環境の崩壊に左右されるでしょう。

この時にあたって，失われようとしている自然と，危機に臨んでいる動物界を，いま一度ふりかえって，認識を新たにすることは，人類にとって無限の意義をもつものと信じます。

生きている動物界の実態を明らかにし，自然への親しみを呼びおこすことは，また人類の未来についての教訓ともなりましょう。

朝日新聞社が，フランスのラルース社と提携して「朝日＝ラルース　世界動物百科」を発刊するのは何よりもこのためであります。

本誌は現在この地球上に生きている動物の生態を，全世界から選んだもっとも美しいカラー写真でとらえながら，動物のなかでいちばん人間と縁の近い哺乳（ほにゅう）類，それも人間の〝親類〟であるサルからはじめ，鳥類，爬虫（はちゅう）類，両生類，魚類，昆虫（こんちゅう）を含む無脊椎（むせきつい）動物の順で紹介していきます。

内容は，高い学問的水準を保ちながら，青少年にも親しめる平易な表現で，生きた動物の姿を興味深く伝えることにつとめました。

とくに日本の読者のためには『私たちの仲間』のページを添えて〝動物週刊誌〟としての内容の充実をはかり，世界と日本の動物界のニュースや話題をおさめました。また日本の第一線動物学者の手により，カラーページを補完する解説と注をつけ，あるいは日本の動物についてのより詳細な紹介を行ないました。

本誌はアイウエオ順に並べるこれまでの〝引く百科〟の観念を大きく打破しました。192 週にわたって楽しく読み進んでいくうちに，おのずから動物についての百科的知識が集積されていく〝読む百科〟として，いつまでも読者の皆さんに親しまれることを期待してやみません。

総監修

岡田　要　日本学士院会員
末廣　恭雄　東京大学名誉教授
古川　晴男　前東京学芸大学教授
宮地伝三郎　京都大学名誉教授
山階　芳麿　山階鳥類研究所理事長

編集委員

阿部　宗明　農林省東海区水産研究所技官
上野　俊一　国立科学博物館研究官
浦本　昌紀　山階鳥類研究所員
小原　秀雄　女子栄養大学教授
日高　敏隆　東京農工大学教授
堀越　増興　東京大学総合研究資料館助教授

世界動物百科　第8号　5月2日

目次

カラーページ

監修　伊谷純一郎（京都大学理学部助教授）
翻訳　中原好文（杉野女子短大講師）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。

□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。

□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。

□人名，地名は，本人または原地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL 052－231－8131

次号予告

4月28日発売



世界動物百科　9号　5／9

カラーページ

私たちの仲間

©1971 ASAHI SHIMBUN, Tokyo, pour la langue japonaise・Librairie LAROUSSE-Nouvelles Littéraires, Paris　RIZZOLI EDITORE, Milan

私たちの仲間

8号………5月2日

トピックス

ムカシヤンマの生態わかる

世界でもっとも原始的なトンボで，その習性や環境など，なぞにつつまれていたムカシヤンマの幼虫の生態が，日本蜻蛉学会会員の武藤明氏（36）によって明らかにされた。

ムカシヤンマ *Tanypteryx* は日本と北アメリカに生息し，日本では本州と九州の低山地にみられる。ジュラ紀（1億7000万年前）に栄えたトンボの遺存種で〝生きた化石〟として有名だ。

武藤氏は金沢市の低山地でムカシヤンマの幼虫を発見，幼虫が土のなかに穴を掘って生息することを突きとめ，約2000匹の幼虫を10年間にわたって観察し研究を続けてきた。

それによると幼虫はふつうのトンボと違って，低山地の谷あいやコケやスゲのおい茂った湿地帯に横穴を掘って生活する。穴の大きさは直径2センチで，深さは5～15センチのいきどまりだ。

内部には貯留水があって，温度は夏でも25°C，冬は6°C前後で凍結しないし，冬眠もしない。

幼虫は穴を絶えず清掃する習性をもち，夜行性で，夕方になると半身を乗りだして，近づくハエ，アリ，クモ，バッタなどのえさを待つ。えさが近づくと触覚をあげて瞬間的に食いつき，穴の中に引きずりこんで水中で窒息死させる。

さらに敵に対しては擬死する習性があり，このとき足を突っぱらして大の字になる。これは敵に穴から引っぱりだされないようにするためだ。

このほか，この幼虫は遊泳性を欠き，直腸呼吸することもわかった。とくに呼吸に伴ってブギィー，ブギィーという音を出す珍しい特性をもっているなど，原始的な生態をそのまま維持していることが確認されている。■

ヘビ・ブーム

最近，動物園で，子どもたちにいちばん人気のあるのはヘビだそうだ。

先日，東京・池袋のデパートで行なわれた「ヘビ展」にも文字どおりの〝長蛇の列〟が見られたし，係員が取りだして見せるヘビを平気でつかむ少年たちが多かった。さらに，鳥獣店ではヘビの需要が，ここ3年で40パーセントの伸びを示している。

現在，山口県宇部市の常盤公園で開催されている「生きた世界のヘビ展」も人気上々だ。ここにはヘビの大王といわれる重さ100キロもある大きなニシキヘビをはじめ，コブラ，ガラガラヘビ，キングスネークなど80種，300匹が世界各国から集められている。（5月16日まで）

こうしたヘビ・ブームが起こったのはなぜか。「子どもたちは自然のなかでヘビと対面する機会がなく，ヘビに対する恐怖心がないから」という見方が多いが，「人間の心が冷たくなって，冷血動物に近くなったからだ」といううがった意見もある。■

クマの異常発生

昨年から今年にかけての1年間，岐阜県の飛騨地区を中心に，クマが大量捕獲された。

岐阜県林務部に，届け出があった分だけでも354頭にのぼり，例年の100頭前後という記録を，大幅に書きかえた。これまでの大量捕獲の記録は，昭和43年度の259頭だから，まさに異常発生といっていい。

このため，県では1頭につき2000円の捕獲報奨金を出していたが，予算が100頭分しか組んでなかったので大あわて。イノシシやウサギの報奨金をクマにまわして，そのアナを埋めたという。

昨年は，クマの好物であるクマザサが数十年に1回の繁茂する時期にあたったので，クマがふえた。そのうえ早い降雪で山奥の食べ物を失って山をおりてきたため，捕獲量がふえたのだろうと林務部ではみている。

しかし，それだけでなく，クマの隔年繁殖という通説が怪しくなってきたし，出産年齢も早まっているのではないかという推論もある。

〝早熟〟が野生動物の世界にまで波及していったわけだ。なお，これらクマの出現による被害額は，山林被害（春先にスギやヒノキの皮をはぐ）など約1億5000万円にのぼっている。■



やはりオランウータンだった

イギリスの動物園でオランウータンの赤ちゃんが生まれた。

ところがその母ザルは育てることを拒否，どこかの国の若いママのように生みっぱなしで知らん顔。

しかたなく飼育係が自分の家に連れ帰り，かれの妻に育児を頼んだ。この奥さんのミセス・ガンジーは昨年出産したばかりで育児に自信があるとはいっても，オランウータンの赤ちゃんはもちろんはじめて。

スポック博士の育児書を読んでもサルの項はない。そこで昨年わが子を育てたときと同じようにすることにした。

おふろに入れてベビーパウダーをはたく。腹帯をぴったりまいておむつをあてる。きれいなタオルでからだをつつんでから，ミルクを150cc与える。

そして3か月たった。1人ではさびしいだろうと，飼育係が動物園から半年ぐらい年上のオランウータンの子どもを遊び相手として連れてきた。

ところが全然興味を示さない。それどころか，自分の仲間はこちらだと，ガンジー夫人の子どもばかりを追いかける。指をしゃぶったり，ミルクを飲むしぐさまで人間の赤ちゃんそっくりだ。

このまま育てばおもしろいことになりそうだと，飼育係夫妻が考えだしたころ——生後6か月ほどになったころだ，突然，窓から外に向かってキィキィと鳴きだした。

毎日あまり激しく鳴くので，もう一度先日のサルを連れてきたところ，前とは反対にとんだり，はねたりの大歓迎。

それだけでなく，身につけていたパンツやタオルまでいやがりだす始末。そのままいっしょに動物園に帰ることになってしまった。

やはり血は争えないものだ。■

（写真は，ガンジー夫人からミルクをもらうオランウータンの赤ちゃん）



三陸大地震の当日
小田原海岸の波打ちぎわでとれた
常時数千メートルの海底にすむ
深海魚——シギウナギ。

地震に先だつ魚の異状

末廣恭雄

**ロサンゼルス地震の惨状が報道されてから
日本にも大地震来襲の危機感が急速に高まってきた。
地震といえば，すぐ連想されるのがナマズだが
はたして魚類は地震を予知するのだろうか。**

わたしの勤務先である京急油壺マリンパーク水族館の図書室には「安政見聞誌」という古書があるが，この本は安政2年，つまり1855年10月2日の江戸の大地震（マグニチュード6.9）のありさまを克明に記したもので，そのなかで地震前のナマズの異常生態について，次のような記事がのっている。

『本所永倉町に篠崎某という人あり，常に漁を好みて夜々川へ出でにけり。二日の夜も珠数子という物にて鰻を取らんとて川にあさりけれども，鰻は逼去りて一つも得取らず，稍ありて，鯰三つ釣りけり。さて今宵は何故に斯く鯰の騒ぐやらん，鯰の騒ぐ時は地震ありと聞く，若しさる事もや有らんと家に帰り，家財ども庭へ取出しければ，女房は異しき事し給うもの哉と笑いけるが，果して地震ありて家は破れけれども，家財は損せざりけり。其隣なる人も漁を好みて，其夜も川へ出で鯰の騒ぐを見たりけれども，争でさる事あるべきとて釣しつつ有ける間に，地震いければ，驚いて帰りて見るに，家も塗籠も既に破れ果て家屋も皆砕けにけり。』

以上は魚類と地震，とくによくいわれるナマズと地震の非常に古い記録だが，これ以外に，地震に先だってあたかもそれを予知するかのような各種動物の異常生態を記した資料は山のようにある。それにこういった資料をひとまとめにした越智秀一氏の「天災予知集」という本がある。

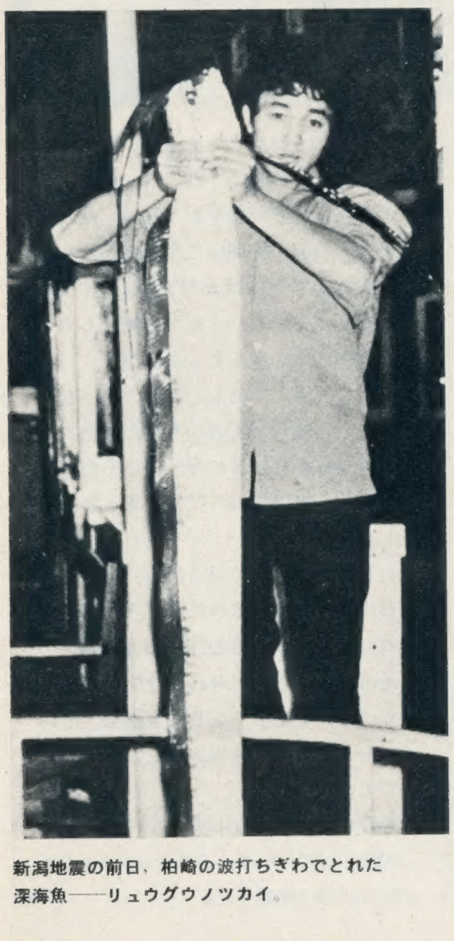
そこで，そのなかから各種の関係動物を少しずつ選びだしてみると，まず哺乳（ほにゅう）動物ではネコ，タヌキ，ネズミ，鳥類ではキジ，カラス，ニワトリ，爬虫（はちゅう）類ではヘビ，魚類では各種魚類，節足動物ではムカデ，ヤスデ，その他の昆虫（こんちゅう）やミミズなどのような，下等動物まであげられている。つまりこういった動物たちが，地震に先だって常ならざる行動をしたという例証がいちいちあげられているのである。

しかし以上の記録は，それらを観察した人びとが，一般大衆であるという理由で，その信頼度が薄いようだが，次に掲げる沢村武雄博士の「日本の地震と津波」の記事は，そのまま著者が高知大学教授で，しかも地震観測所長の職にある専門家だから，じゅうぶん耳をかたむける価値があるように思える。

博士も，各種の動物が地震に先だって異常生態を示す例をあげているが，そのなかで，とくにおもしろく思えたのは，1889年の「地学雑誌第1集6巻」にでている英国のミルン博士の次のような記事である。沢村教授の著書をそのまま転載させていただけば，次のとおりだ。

『大地震ある毎に，犬馬，家畜は常に異常を呈し，その動作穏やかならず。魚類もまた感触するは疑うべくもあらず。例せば，1749年ロンドン府の地震前には，魚類近海に踊り，水面ために波動をかもし，死体水上に幾万となく浮かべり。8年前の東京地震前には，猫家に荒れ回り，犬ほえ，狐叫び，馬はうまやにけりまわり，また，いななけり。されば獣は地震の前に異常の起こるべきを知ること疑いなし。またほかにおもしろき実例あり。小馬は馬屋に舞い，もぐらは急に小丘を作り，きじは黄色の声を出し，蛙はグアの音を止め，地震の来たるを告げ，特に，ガチョウ，犬，豚は感官最も鋭きものなり。去夏，磐梯山破裂地震前に蛇山下の村落に来たり，猿は悉く東北の吾妻丘に走り，大変の数刻前，兎は同じく東北の麓に狂い回る。さればその異常の行状は，何に原因せしやは判然せざれども，ある動物は小震をよく感じ，経験によって危をのがれるために，狂い騒ぐによるなるべし。またイタリーのローマに地震せし前には，魚の死体幾万となく下流に流れ，鼠は半死の態に街道をさまよい，その数の多きことあたかも鼠の雨を成せりという。けだしこれらは地震前に炭酸の地の割れ目より漏れ，その毒気に当たり苦しむによるなるべし。』

さてわたしだが，魚類の研究者として地震の際の魚類の異常生態については，1933年の三陸沖の大地震のおり，小田原海岸に日ごろは数千メートルの深海にいるシギウナギが，半死半生の態で漂着したのを観察して以来，できるだけ手をつくして地震前の魚類の異常生態について記録を集めてきた。なお，かつて東大の地震研究所に関係のあった故武者金吉氏も，こういった事実収集に努力されていたので，武者氏の集めた資料も参考にして，わたしは一昨年「京急油壺マリンパーク水族館年報」第1号に「地震に対する魚類の異常生態」と題する報告書を発表したが，このなかでわたしは，主として関東大地震以降，先ごろ十勝地震や宇和島湾地震までもふくめた大地震前の魚類の異常生態について，ややまとまった結果を報告している。



新潟地震の前日，柏崎の波打ちぎわでとれた
深海魚——リュウグウノツカイ。

この報告書には詳しいことが書いてあるが，紙数の関係でそれを略し，ここでは結論だけを申し述べれば——海底地震に対しては深海魚をふくむ各種の海産魚が，陸地の地震に対してはナマズ，ウナギを主とする淡水魚が，いずれも地震を予知するかのごとき異常生態を示す例が多い。ある場合は魚が水面に浮かび上がったり，水面から飛び上がったり，異常に集合したり，よく釣れたり，あるいは深海魚が波打ちぎわにただよったりするといったもので，こういった異変は，地震前数日というものが多く，とくに大震の前日という例記が，統計的に第1位を占めているのは注目に値する。

多少余談になるが，1968年の宇和島湾地震（マグニチュード6.6）のおり，わたしは講演を頼まれて，宇和島市に近い伊豫大洲に1泊した。その夜午前1時過ぎ，大地震が襲ってきたのだが，その前日の夕方である。旅館の窓から直下の肱川の水面を見ていると，何千という川魚が水面に泳ぎのぼり，あるものはジャンプするといった騒ぎようだ。あまり不思



僕は間見谷さんに訊いた。
「ハナコの赤ちゃんの声，いつなら聞こえますか」
「いつ……」
「朝とか，昼間とか，夜とか」
「ああ，それなら，いつだって構わないよ」
「じゃ，今でも」
「ああ」
2日めの朝だった。よく晴れ，サングラスを用意していなかったので眼が痛い。
「ついておいでよ」
間見谷さんは先に立って歩き始めた。冬眠中のクマには餌を与える必要がないのに，毎日様子を見に通っているのだろう，ハナコのオリがある所まで雪が踏み固められていた。
50万円をかけて新設したというオリは，かなり広く，右手には餌場，左手には水浴場が作られている。産室は中央にあり，外から見えないようにシートが掛けられ，その上にまぶしい雪がつもっていた。
間見谷さんは，オリの鉄棒に手を掛け，指でシートをくすぐりながら声をかけた。
「おうい。ハナコよお，具合はどうだ」
その声に応じて，中で巨大なものが動く気配がした。すさまじい鼻息も一発。
それから急に静かになった。針が落ちる音も聞きとれるほどの静寂がつづく。
と，急に，あの懐かしい声が聞こえてきた。
——フンギャ，フンギャ，フンギャ……
哺乳動物が母親を求める声である。ご

ヒグマと2人のイノシシ　7

ついにどんべえを

畑　正憲

く幼い時分には，乳を吸うという共通の作業をするためか，哺乳動物の赤ん坊は非常によく似た声をあげる。

そらそら，これがそうだよ，と間見谷さんは誇らしげな眼顔で合図をしてくれた。

初めて間近で聞くヒグマの赤ん坊の声である。僕は雪の上にどっかり腰を落として心臓の高鳴りを押えようとしたが，しばらくは自分の血の流れの音にわざわいされて，はるか彼方で子グマが甘えているようだった。が，落ち着いてくると，その声の間隔にリズムがないことに気づいた。奇妙に声が重なり合うのである。

「2頭だな」

そう呟いて，僕は思わず雪をつかんでいた。

ここでヒグマをわけて貰えたら，と思ったのはその瞬間である。2頭いるなら，どちらかをわけて貰えるかもしれない。

やがて，2頭いることは，もっと明確になった。甘え声とは別に，

——コックン，コックン，

という，乳を吸う音が聞こえ始めたのである。それは一定のリズムで，低いが，きっぱりとした音だった。

その間，母グマは物音一つたてなかった。自分の城の中でくつろいで，夢うつつで乳を与えているに違いなかった。オリの中は見えなかったが，僕はかなり具体的に中のようすを頭に描いた。

母グマは背を下に寝そべり，目をつむって耳だけをそばだて，外の音を聞いている。子グマはふかふかした毛におおわれ，鼻がまだぺっしゃんこ，筒状の口で乳首に吸いついている。大きさはネコほどあるだろうか，体毛の色はやや薄いネズミ色。

僕は間見谷さんの顔を見上げ，

「吸ってますね」

「うん，うん」

「2頭ですね」

「だと思うがね。ときどき，3頭だと思いたくなる」

「3頭？」

「その可能性もある……だけど，ま，2頭だろうがね」

まだ日は斜め。大雪山から昇ってきた太陽が，かなり長い影を作っている。

僕は単刀直入に切り出した。

「どうでしょう。このうち1頭ゆずっていただけませんか」

「え？」

「もちろんお金は払わせていただきますが，お金なんか誠意のしるしにしかならないことはよく知っています。どうか1頭，私に飼育させて下さい」

「ダメだね」

間見谷さんは首を振って，もうこれ以上聞きたくないといった風に，大またで家の方へと歩き始めた。幅の広いガッシリした肩が，断固たる拒絶を表わしていた。

「ねえ，お願いです」

「ダメだね」

僕は居間まで彼を追った。

どこかで誰かにねだらねばならないことだが，これは僕にとっても辛いのである。できるなら愛育されているヒグマの子を貰いたい。そして，これだけ大きく



雪にうもれたヒグマのオリ。
中では子グマの乳を吸う音がしていた。

なりましたと報告したい。ところが，動物を愛育している人にとっては，どんな猛獣だって自分の子供同様である。人の手にゆだねるなんて，とうてい考えられないことだ。

しかし，望みは僅かにある。それは，間見谷さんがすでに7頭のクマ持ちで，しかも赤ん坊が2ついることだ。

僕は自分の目的と，計画を説明した。

「今でこそ害獣です。発見されしだい殺されてしまいます。だけど，きっと近いうちに，数が激減して保護されるようになります。それは世界的な傾向で，人はそれだけ恥知らずに自然を壊してゆきます。ですから，今のうちに，ヒグマの素晴らしさを確認し，全国の読者にわかって貰いたいのです」

「そうだよなあ」

と間見谷さんは天井を見上げ，

「害獣だなんて，とんでもない。人間がヒグマの住まいを侵す。だからヒグマが向かってくるのだ」

「ヒグマの被害が，なんていいますが，10年間に30人から40人」

「命知らずの奴がいるからなあ。なんの対策もなく山に入るし，人間が食う食料を残してくるのだから。……ヒグマってえのは，利口だし，美食家だから，人間の食料の味を憶えると，人を襲っても食べようとする」

僕たちはヒグマ談義をしながら，夕食を平らげ，お茶を飲み，午前3時近くまで起きていた。この家では，これほど遅くまで起きていることはないらしい。奥さんはあくびを連発して，ついにもう寝ましょうよと立ち上がった。

その時である。間見谷さんが，低い声でボソリと言った。

「差し上げましょう。1頭ゆずりますよ」

「え？」

僕はわれとわが耳を疑った。

「もっといい環境で飼われるのなら，その方が子グマの仕合わせかもしれない。かわいい子には旅をさせよといいます。1頭，養子に出しましょう」

そう言ってそそくさと寝室へ引き揚げる間見谷さんの眼には，涙がいっぱい貯っていた。

客間には，2組蒲団が用意されていた。窓の外は零下20度の寒さである。手早くセーターを脱いでもぐりこむと，暖かい湯タンポが足にふれた。

となりの蒲団で山崎さんが小声で言った。

「よかったですね」

「ええ」

「絶対に約束を守る人ですから」

「そうでしょうとも」

僕は眼をつむった。いよいよ，どんべえを手に入れたのである。しかし，当初予想していたほどには心は弾まなかった。それはたぶん，あの涙のせいだろうと考え，これほど純粋にヒグマを愛している人がいることが無性に嬉しかった。しかし湧きたつような嬉しさではなく，名画を見た後のようなしみじみとした感銘に近いものであった。■

議な光景だったので女中に話しかけてみたが，女中の答えは，川下に堰ができたため川水がよどんで，魚たちが喜んでいるのでしょう……といったようなことで，その話はそれっきりになってしまった。ところが今もいったように，その夜のうちに大地震が襲来したので，さては，あの騒ぎは，魚類の予知的な異常行動だったのかと気づいたわけだ。

このように，こういった観察はまったくのバイチャンスだし，その場にいき当たってもうっかり見のがしてしまうことが多いわけだ。したがって，水産関係の多くの人の協力が期待されるわけだが，現在のところではそれがなかなかむずかしい。なぜならば，魚のような下等な動物が，なんで地震を予知できるものかという，魚類軽視がその主なる原因だと思う。それに，地震の関係者たちが，地球物理学的な現象以外のこういった現象には，目を向けないし，耳もかさないためではないかと思う。しかし長年，余暇にやったとしても，地震と魚類の異常生態にたえず関心を向けてきたわたしとすれば，現在の段階では，両者の間にまったく関係がないとはいいきれないばかりでなく，そうとう深い結びつきがあるのではなかろうかと思う。

わたしは日常そう信じるがゆえに，つねに口にしていることだが，この自然というものはまことに公平なもので，われわれ人類には〝科学〟という頭を与えて，自然の災害にも対処しうるようにしてくれている。現在の気象通報などは，たしかにそのよい例である。ところが，魚もふくむ一般動物には科学がない。しかし，公平な自然は科学の代わりに人知では計り知れない不思議な本能をかれらに与えてくれている。そしてそれによってかれらは自然の災害を予知し，それに対処しているからこそ，かれらはその種族を保ち得ているわけなのであろう。

いま本能といったが，渡り鳥や，サケが故郷の川へ産卵にもどる習性などは，現代の科学をもってしてはなんとも不思議な行動なのである。第六感というものか，それとも未知の科学的ファクターを仮定しない以上，かれらの行動は一種のミステリーなのである。

そういったふうに考えると，大地震が起こる前の魚類の異常生態は，決して無視すべきではなく，この生態を科学的に追求する一面，全国各地の水産関係者が水産庁のごとき中央機関を窓口にし，魚類の異変を合理的に取材して，地震予知の〝資料〟にしてはどうかと考えるのである——地球物理学的に地震予知のできない現在では，これは必須の国策と思えるが，どうだろうか。■（東大名誉教授・京急油壺マリンパーク館長）

もうひとつの世界

5

グループ・5プラス1

哺乳類のキミとボク







え　木村しゅうじ

人間世界には，現在35億の個体差が存在し，それらがさまざまな生活を営みながら，その個人と個人が目に見えぬ「縁の糸」で結び合わされて，人間の社会，つまり「ヒト」という生物の種の世界をつくっている。では，動物の世界，とくにヒトをふくむ哺乳（ほにゅう）類の世界ではどうなっているだろうか。

霊長類研究グループは，ニホンザルを徹底的にマークして個体を識別し，個体と個体とを結ぶ種社会の構造を明らかにした。こうした例により，動物の世界の,個性の存在が確かめられたのである。

イギリスのあるナチュラリストが，ケニアで百数十例のキリンのはん紋を調べたところ，その頸部のはん紋は個体ごとにすべて違っていることがわかった。キリンは頸部のはん紋で個体の区別ができるというのである。

ゴリラの野外研究で有名なシャラーは，インドでシカとトラの野外研究を試みたが，顔にあるしまでトラの個体識別をしている。もちろんゴリラについても，テレビタレントの某に似ているというように，人間に見たてて具体的な個体識別を行なった。

こういったしまやはん紋などの違いは，個体どうしでは，はたして認識されているのであろうか。これに答えるような研究は，まだほとんど行なわれていないので，はっきりした回答はない。

しかし，まったく識別できないものならば，このような違いが，そもそもなぜ生ずるのだろうか。視覚がとくにすぐれているとはいえない種でも，個体識別はともかくも，種の違いをはん紋によって区別していると思われる例がある。たとえばシマウマである。

シマウマにはだれもが知っているようにしまがあり，そのしまが種によって違う。とくに腰のあたりのしまのまじわり方が，種によって明瞭に違っている。南アフリカのヤマシマウマは背の縦じまにはしごのように細かい横じまがはいり，それが腰のしまとまじわらない。東アフリカ中心に分布するバーチェルシマウマは，背のしまと腰のしまがまじわっている。一方，北東アフリカのグレビーシマウマは，わき腹のしま柄がスムーズに流れ，背のしまはひとすじの縦じまとなっているだけで，腰のしまとまったく無関係である。

ケニアの北部では，このバーチェルシマウマの１亜種グラントシマウマと，グレビーシマウマとが同じ地域に生息している。そして同じ場所でえさをとっているばあいも知られている。だが，ここで観察したナチュラリストによると，この両種の間には雑種はできていない。しまのほかに，体形や尾などの違いも関係しているのであろうが，なんといっても求愛に際しては，臀部（でんぶ）のはん紋の差がたがいの識別にものをいっていると考えることができる。

シマウマはそれほど視覚が発達してはいないのだが（嗅覚は鋭い),それでもこの程度は見分けているといえよう。こうして哺乳類の世界で，それぞれの種内での個体差が，どこにどのようにあらわれているのかが調べられてきている。

動物園の飼育係の人びとはもちろんのこと，一般の人びとでも，哺乳類（とくに大・中型哺乳類）を飼育した人は，その性格と結びついた個体差の存在を早くから知っていた。性格と結びついた個体差となれば，人間にはとらえやすいが，野外で最初からそれを見分けることは不可能であり，はん紋などによる個体識別のほうが役にたつ。その他，人間にはとらえ得ぬかおりや音の個体差もあろう。イヌはサインポストにかけられた尿のなかに，個体差を嗅ぐのかもしれない。コウモリの声にも，個体差はあるだろう。

人間は今まで，それまでの観測方法からはみ出した動物の行動を，すべて不思議な本能としてしまったきらいがある。かつてコウモリが不思議な本能で方向を認識するといわれたのも，エコーロケーション（反響位置測定）のはたらきであった。そしてこれは，食虫類の一部にも存在するようである。また，オットセイなどの大きな群れをつくる種のなかで，母と子とが認知しあうはたらきもよくわかっていない。このような〝なにか〟のはたらきが，まだまだ哺乳類の種の世界のなかにも存在する可能性がある。その１つが，個体識別の問題でもある。

個体識別による個体差の存在は，当然一方では地域個体群の特徴や近似種の間の区分のしかたへと問題が発展し，分類学上の手がかりとなる。また，個体間の関係がどうなっているのかという，いわゆる種社会の基本的な課題を調査する手がかりともなるだろう。人間は，まだ哺乳類の世界を，かすかにのぞいたにすぎないようである。■　（O）

四つの葡萄色の瞳　最終回

年ごろになる

江藤　淳

アニイが訓練士のＳさんに連れられて，道を歩いているところに，あるとき偶然行きあわせたことがあった。ブルーの曳綱をつけた黒い小アザラシのようなものが，毛をユサユサと風になびかせながら，ばかに真面目に一直線にこっちに向かってやって来る。ハハアやってるなと，子供が学校で体操をしているのを見かけた親のような心境になって，私はＳさんに手を振って合図をした。

Ｓさんはすぐ気がついて，会釈してみせたけれども，アニイのほうは知らん顔をしている。ようやくすれ違うというときになって，「アニイ！」と声を掛けてやると，「あッ」というような顔で立ち止まり，次の瞬間にあと肢で立ちあがり，前肢で私にすがりつくようにして，はげしく尻尾を振った。

俗に「尻尾を振る」とはいうものの，実際にはイヌは尻尾を回転させるのである。アニイは短い尻尾を懸命に回転させながら，コッカー特有の感情のこもった瞳で，私を見上げていた。

その瞳は，死んだダーキイのそれと同じように，すっかり葡萄色にかわっていた。そういえば顔かたちまで，アニイは不思議なくらいダーキイに似はじめていた。ただ若い彼女の口のまわりが，晩年のダーキイのように白く変わっていないだけだ。生後１ケ月半の子イヌでやって来たとき，私は家内に，「うちで飼っていれば，うちのイヌらしくなるさ」と，繰り返していったものである。だが，実は，本当になんの成算もあるわけではなかった。こんなふうになついて，すがりついて来ると，決して確信していたわけではなかった。

「それじゃあちょっと散歩して来ます」

とＳさんがいうと，アニイは私からはなれて，また真面目くさって一直線に歩きはじめた。この歩きかたは，むしろダーキイより行儀がいいくらいだ。ダーキイは両方の前肢を同時に出して，曳綱をグイグイ引っぱりながら，潜航艇のように地を這い出すことがよくあった。あれにはまったく閉口したものだ。

坂を降りて行くアニイの後ろ姿を見ていると，腰のあたりもまる味を加えて，だいぶ女っぽくなりはじめている。そろそろコンテストに出してやらなければ，と私は考えた。そして，そろそろお婿さんのことも考えてやらなければ。

そういえば，ダーキイをはじめてコンテストに出したとき，あれはたしか芝公園だったが，彼女は牡のグループといっしょに歩き出してしまって，あやうく選外に落とされるところだった。最初のお婿さん候補に，見るからに鈍感そうな黒コッカーが来たときには，私はとたんに不機嫌になって，半日ほど当たり散らして家内を困らせたものだ。今度はああいうことはつつしもう。しかし，それにしても，アニイにはよほどいい牡をお婿さんに連れて来なければと，私はどこか一抹の淋しさがないわけではない感情で，考えた。■

霊長目 原猿亜目

亜目	上科	科	属
原猿亜目	メガネザル上科		メガネザル属
	キツネザル上科	ロリス科	ガラゴ属
			スローロリス属
			ロリス属
		アイアイ科	アイアイ属
		インドリ科	インドリ属
		キツネザル科	キツネザル属
			コガタキツネザル属



緑色の地域は原猿亜目の分布域である。アフリカの南半分，アフリカ大陸の東のマダガスカル島，アジア大陸の南部から東南へ，インド，インドシナ，マレー半島，スマトラ，ジャワ，ボルネオ，セレベスから，その周辺の島々に生息していることがわかる。

原猿亜目　*Prosimii*

原猿（げんえん）亜目は熱帯にいる哺乳（ほにゅう）類で，霊長類に属しているが，真猿（しんえん）類よりも下等である。短い毛におおわれた顔と，ものをつかむことのできる蹠行（しょこう）性の四肢（しし）とをそなえている。赤道アフリカとマダガスカル，アジアにすんでいる。

昔のナチュラリストたちは，これらの動物をほんとうのサルと見なしていたが，現在ではキツネザル亜目，ないしは原猿亜目という名のもとに，真猿類とは別の亜目として特別に分類されている。

原猿亜目に属するすべての動物の特徴を，ひとまとめにして記述することは困難である。その体長はキツネくらいのものから，ヤマネ〔注1〕くらいのものにいたるまで，さまざまである。からだつきは一般にきゃしゃで，かぼそいにもかかわらず，頭部には長い鼻づらがあって，ちょっと見たところイヌかキツネの頭部を連想させる。

後肢（こうし）は前肢（ぜんし）よりも太く，属によってははるかに長い。ある種のものではかかとが比較的短いが，他の種のものでは非常に発達している。手や足の構造は，それぞれの種類によって異なっている。しかし多くの場合，第1指（親指）は他の4指と向かい合っており，第2指をのぞいて，ほとんどの場合すべての指に平づめがある。

尾もまた，種類によって著しい相違を示している。ある種のものでは尾がからだよりも長いのに，他の種では完全に退化してしまっているように見える。しかも尾は，種によって豊かな毛でおおわれているものもあれば，部分的に毛のないものもある。

全般的に，目は大きく暗がりでものを見るのに適している。耳は非常によく発達していて外耳をそなえているが，外耳に毛がはえているかいないかは種によって異なっている。毛並みは柔らかく，密生しており，羊毛のようにふさふさしていて，こわい毛は例外的にしか見られない。





アンワンチボ。ロリス科。
カメルーンやナイジェリアの森林にすむ
原猿亜目の夜行性の動物で
昼間はこんな格好で眠っている。

スレンダーロリス。ロリス科。
セイロン島とインド南部の森林にすむ。
大きな目に太陽の光は強すぎるようだ。
夜行性のおとなしい動物で
からだは小さく頭胴長20センチくらいである。

PH. MICHEL BOULARD DES BARTLETT-A. DENIS PRODUCTIONS

さらに注意しなければならないのは，この亜目に属する動物の歯が，歯並びの点でも，形状ないしその数の点でも，種によって著しく異なっていることである。

頭骨の特徴は，大きな眼窩（がんか）をそなえていることで，それらはたがいに近接しており，隆起したへりによって縁どられている。ただ眼窩は，頭骨の壁の内部に閉じこめられていないで，側頭の後方では骨壁を欠いている。〔注２〕

最後にもう１つつけ加えておかなければならないのは，原猿亜目の動物は真猿類と違って，胸のほか，腹部にも１対の乳房をもっているということである。

これらの動物は，木々が非常に密生していて，しかもできるだけ果樹の多い森林地帯に生息している。原猿亜目に属するすべての種は樹上性であるが，そのうちかなり多くの種は好んで地上でも生活する。かれらは果実，種子，木の葉，それに草などを食べている。ただし，あるいくつかの科に属するものは，もっぱら昆虫（こんちゅう）と，小さな脊椎（せきつい）動物をえさにしている。

大きい目をした夜行性の動物

これらの動物は，多少の差はあるにしても夜行性で，森のなかのもっとも暗いところに身をひそめている。眠るときには木のほら穴の中にはいって，まりのようにからだを丸める。しかし，その眠りは非常に浅く，ハエやコガネムシの羽音を聞いただけですぐに目をさましてしまう。目をさますやいなや耳をぴんと立て，自分の周囲に，まぶしそうな視線を向ける。日中の強い光線は，耐えがたいからである。

まれには例外もあるが，知能はきわめて低いようである。おく病でこわがり屋だが，ときによっては，敵の攻撃を勇敢にかわすこともできる。飼うと，人にかなりの信頼感を示すようになるが，それでもやはり生来のおく病さは抜けきらない。

原猿亜目に属するすべての動物は，一定したかなり高い気温を必要とする。事実，寒いとこれらの動物はふさぎがちになり，重い病気にかかることさえある。



ポト。ロリス科。
アフリカのガボンで写したもの。
ふだんの動作は緩慢だが
えさにとびかかるときは驚くほどすばやい。
PH. DEVEZ–C. N. S.–M. B. G.



アレンガラゴ。ロリス科。
アフリカのガボンで撮影したもの。
アフリカには34亜種ものガラゴがいる。
PH. DEVEZ–C. N. R. S–M. B. G.



原猿亜目に分類される種は，次のような特徴をもっている。

- ものをつかむことのできる四肢があり，そのからだつきはとりわけ樹上生活に適していること。そのうえいくつかの種は，すばらしい跳躍力に恵まれていること。
- 顔が毛でおおわれていること。
- 目が大きいこと。
- 歯は36本。あごの片側で，上下それぞれ門歯２／２，犬歯１／１，小臼歯（きゅうし）３／３，大臼歯３／３の歯式をもっていること。ただし，アイアイ科が18本の歯しかもっていないように，歯の数の少ないものもある。〔注３〕
- 大部分，草食性ないし雑食性であり，昆虫をえさとするものもあること。
- 夕暮れ，または夜間に活動する習性をもっていること。〔注４〕

原猿亜目の動物は，サルにかなりよく似ているが，サルより下等で，熱帯にいる哺乳（ほにゅう）類のうちでもっとも珍しく，もっとも興味あるものの１つに数えられている。とくにマダガスカル島では，もっとも特徴的な動物相を形成している。この原猿亜目の動物の生息地は，ほとんどの場合密林に限られており，アフリカ，インド，インドシナ，インドネシア，フィリピン群島などに分布している。

かつては，ヨーロッパやアメリカにも数多くの原猿亜目の動物がいたが，発見された化石によって，絶滅したことがわかる。

原猿亜目は，現在では霊長目に加えられており，メガネザル科，ロリス科，アイアイ科，インドリ科，キツネザル科の５科に分かれ，16属，31種がある。〔注５〕

メガネザル科　*Tarsiidae*

原猿亜目に属する小型の動物で，跳躍に適した非常に長い後肢（こうし）をそなえており，指先には吸盤のようなものがついている。東南アジアのフィリピン，セレベス，ボルネオ，スマトラ南東部に見られる。

メガネザル科には，その体長がネズミにも及ばないような小さい種もいくつかある。この科の動物たちは，小さくてずんぐりした胴をしている。首は短く，真後ろまで回すことができる。丸い頭には，非常に大きな目と耳が飾りのようについていて，口には厚いくちびるがあり，34本の歯をもつ。

また，前肢は，短くて強く，指には平づめと大きな吸盤状のものとがついている。親指は短く，他の４本の指と向かい合っている。

ショウガラゴ。ロリス科。
大きな目と耳が夜行性動物の特徴である。
光を出すわけではないが
ヘッドライトのように光る目で
夜間，獲物を求めて動きまわる。

PH. RUSS KINNE

反対に後肢はかなり長いが，それは主として，かかとの発達によるものである。

メガネザル科の種は，次のような特徴をそなえている。

- からだが，あまり大きくないこと（尾の長さをふくめて約40センチ）。
- 木の上にすみ，昆虫（こんちゅう）を食べ，夜間活動をするのに適した体形をもっていること。
- 目がずばぬけて大きいこと。
- 34本の歯をもち，それがあごの片側で，上下それぞれ門歯２／１，犬歯１／１，小臼歯（きゅうし）３／３，大臼歯３／３の歯式をもっていること。
- 後肢が非常に長く，跳躍するのに適していること。
- 先端に吸盤状のものがついた指をもっていること。

メガネザル科には，メガネザル属が１つあるだけで，この属には３つの種がある。

セレベスメガネザル
Tarsius spectrum

大きくて丸い頭部，カエルに似た顔，短い前肢と長い後肢，からだよりも長い尾，これらがセレベスメガネザルのきわだった特徴である。事実，その顔や四肢ばかりでなく，からだの動きのすべてが，樹上生活をするカエルによく似ている。

目は，ジャコウネコの目に似ていて，体長との比較でみるならば，まさしく哺乳（ほにゅう）類のなかでいちばん大きいものである。目と目のあいだは，どちらかというとたがいに近接していて，目の直径は約1.5センチである。耳は，幅の広い大きなスプーンの頭を取りつけたような格好をしている。

首は短く，どこからが胴なのか，はっきり区別できない。胸まわりがきわだって大きいので，胴は上のほうにいくほど太くなっている。手のひらは非常に長い。指は中指がいちばん長く，親指の３倍もある。手のひらと指先には，吸盤のような，小さなクッションの形をしたふくらみがある。

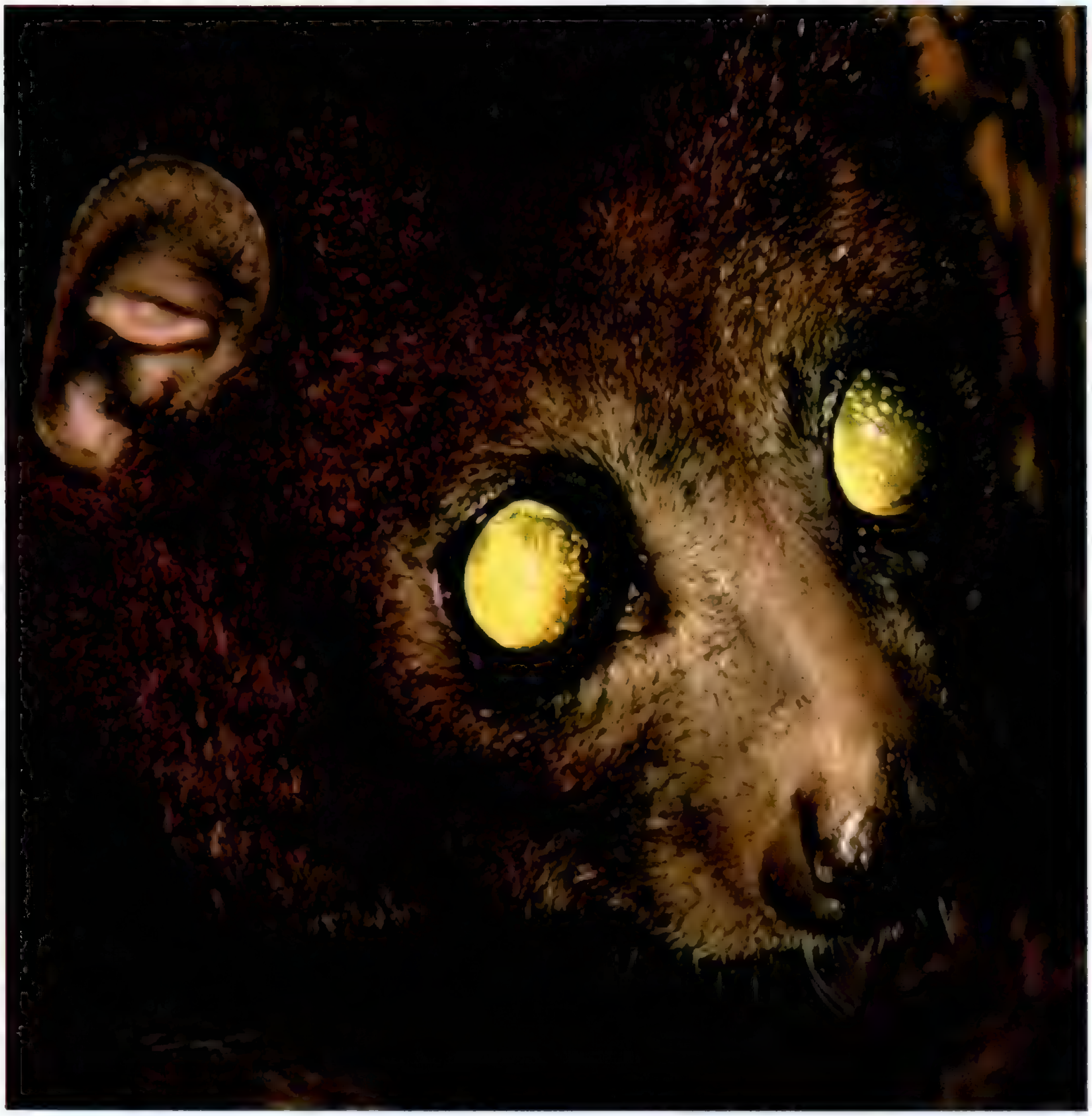
腿はかなりがんじょうで，その先に細い足がつながっている。足のうらは，一面が毛でおおわれている。足の指でいちばん長いのは，第３指ではなく第４指で，これはあまり例のないことである。足の指には，第２指と第３指をのぞいて，まん中でやや弓のように曲がったなめらかな平づめがはえている。この第２指と第３指には，かぎ形に折れ曲がってい





ショウガラゴ。ロリス科。
《ブッシュ・ベビー》という
かわいいあだ名にもかかわらず
雄どうしが激しいけんかをして，相手を殺し
食べてしまうこともある。（上）
PH. RUSS KINNE

ワオキツネザル。キツネザル科。
マダガスカル島にすむ，尾の美しいサルである。
昼行性で，美しい姿のため
外国では，よく家で飼ったりする。（下）
PH. J.P. VARIN-JACANA





てものをさくことのできる鋭いつめ，すなわちほんとうのかぎづめがある。尾は非常に長く円筒形で，わずか先のほうが，少し細くなっている。

頭骨の特徴は，眼窩（がんか）が非常に大きく，頭骨を構成している骨が薄くてもろいことである。頭部と背と四肢の前面部を，一様におおっている柔らかい毛は，胴の腹部では短い。鼻すじ，鼻翼，口の上の部分では，毛は非常に細かくごくまばらにしかはえていないので，実際には目につかないくらいである。毛並みのおもな色調は，黄色みを帯びた灰かっ色である。胸部の毛には，かっ色で白っぽい光沢がある。尾の末端では，毛は黄色っぽい色調を帯びている。

セレベスメガネザルはセレベス島に生息しているが，その数はあまり多くない。しかし，この動物に関する数多くの呼び名や言い伝えは，原住民たちがそれを不思議な動物とみなして，あがめたり恐れたりしていることをはっきりと示している。

伝説につつまれたメガネザル

メガネザルは，とりわけ平地の森林にすみ，日中は木々の葉の茂みや木のほら穴のなかで過ごすが，じめじめしていて暗い場所であることが欠くことのできない条件である。メガネザルは，樹木の根，とくに非常に密生した原始林のなかの太いタケの根の間に巣をつくり，そこにいつもこもっている。

雄と雌とは強く結ばれているので，どちらか１頭を捕えれば，もう１頭を捕えるのはさしてむずかしくない。この小動物は，カエルのように１メートルもとびはねる。日中もそれほどおく病ではない。うっかり木の上から通行人の背中に落ち，両手でつかまえられても，じっとおとなしくしていることさえある。

しゃぼん玉のように丸くて大きなその目と，光の強さに応じて，急速にひろがったり収縮したりするその瞳孔（どうこう）をみれば，マレーシア人たちがこの動物を，特別に崇拝している気持も納得できる。

イギリスの植民地行政官で，シンガポールの建設者であるラッフルズの説明によれば，スマトラの原住民によってメガネザルにつけられた《シンガプア》という名まえは，《小さなライオン》を意味するということである。この呼び名は，おそらく，ある古い伝説からきたもので，それによれば，この動物は，最初はライオンと同じくらい大きかったけれども，その後だんだんに現在の状態まで小さくなってしまったのだという。マレーシア人は，メガネザルを非常に恐れており，木の上にその

ポト。ロリス科。
夜になると，目は
このように強烈に光を反射して輝く。（上）
PH. RUSS KINNE

ポト。ロリス科。
首のところに，護身用の
いくつかのとがった骨の隆起をもっていて
その上には１列の長い毛がはえている。
写真のポトにも，その黒い毛が認められる。（下）
PH. ATLS－VASSELET



姿を見かけると，不吉な目でにらまれたと思いこみ，畑仕事などほったらかして逃げ帰ってしまう。

メガネザルの食べ物も，また数えきれないほどの伝説を生んでいる。17世紀のはじめにある人は，マレーシア人は，メガネザルが木炭を食べるとかたく信じていると語っている。もちろんメガネザルは，昆虫（こんちゅう）と，小さな脊椎（せきつい）動物をおもに食べているから，これは大きなまちがいなのだが。

メガネザルの繁殖について，ある観察記録を引用しておこう。

「わたしが手に入れた雌は，偶然にも妊娠していた。ある朝のこと，この雌は１頭の赤ん坊を生んだ。みたところ弱々しいようすをしてはいたが，母親にそっくりだった。目は大きく開かれていて，からだじゅう毛でおおわれていた。赤ん坊はほとんどいつも母親の乳を吸っており，母親は両脚で赤ん坊を隠しているので，赤ん坊のしっぽしか見えなかった。

この小さな動物は，みるみるうちに力をつけていき，２日後には，自力でなんとかおりの外へ出られそうなようすだった。赤ん坊を見ようとすると，母親はきまって気分を害し，いらだってネコのように赤ん坊を口にくわえて，そのあたりを歩き回りにいってしまうのだった。さらにわたしが気づいたのは，母親がおりから出るときにはいつでも，赤ん坊を口にくわえて運ぶということだった。

３週間後には，赤ん坊はとても大きくなっていた。しかし残念なことには，だれかがうっかりして母親の尾を踏みつぶしてしまったので，母親は何日もたたないうちに死に，またその数時間後には，赤ん坊も死んだ」

ロリス科 *Lorisidae*

ロリス科に属する種は，一般的にみて，次のような特徴をそなえている。

- からだは小さめである。
- 毛は細くて密生している。
- 歯は36本あり，あごの片側で上下それぞれ門歯２／２，犬歯１／１，小臼歯（きゅうし）３／３，大臼歯３／３という歯式をもっている。上あごの第２門歯は短く，しかも左右の門歯の間に大きなすきまがある。
- この科のほとんどすべての種が夜行性である。

ロリス科の動物は，アフリカと南アジアに生息しており，２つのグループに大きく分けられる。第１のグループの特徴は，後肢（こ

スローロリスの母親と子ども。
原猿亜目の動物の赤ん坊は
独立するまでの１年近くを
こうして母親のわき腹にしがみついて過ごす。
PH. J. BURTON

うし）が長いこと，耳が大きいこと，尾が退化していること，敏速に動き回ることなどである。第２のグループの特徴は，前肢と後肢の長さが等しいこと，耳が小さいこと，尾が長いこと，動きが緩慢なことなどである。

ロリス科の第１のグループ，ガラゴ亜科（５種をふくむ）には，ハリヅメガラゴ属 *Euoticus* とガラゴ属*Galago*〔注６〕が，第２のグループ，ロリス亜科（やはり５種をふくむ）には，ポト属*Perodicticus*，アンワンチボ属 *Arctocebus*，スローロリス属*Nycticebus*，スレンダーロリス属 *Loris* がある。〔注７〕

次にオオガラゴと，スレンダーロリス，スローロリスについて調べてみるが，いずれも非常にきわだった特徴をそなえている。

オオガラゴ
Galago crassicaudatus

まず，ガラゴ属について述べよう。原猿亜目のうちでも，ガラゴ属の動物はもっともよく知られており，すでに古代の旅行者たちが，しばしばこの動物のことを書き留めている。

からだをおおっている豊かな毛並みが，この動物を実際以上に大きくみせているが，ほんとうはそんなに大きくはない。

頭はかなり大きく，よく発達している大きな毛のない耳と，たがいに近接している大きな目に特徴がある。四肢（しし）の長さは中くらいで，非常に発達している。指には平づめがついているが，第２指と，ときとして第３指は例外で，それらにはかぎのように折れ曲がったつめがついている。

ガラゴ属は，アフリカだけにいる。そのうちのある種は，もっぱらアフリカ大陸の西部と東部だけに生息している。雑食性で，小動物や昆虫（こんちゅう），熟した果実などを好む。

ヤマネ以上に動作が緩慢なまけもので，日中の大部分は隠れ家の中でまりのようにからだを丸めて過ごす。太陽の光がきらいで，頭を日光から守るよういつも気を配っており，物音に妨げられないように耳をふさぐことさえある。ふいに何かが起こって，深い眠りからさめるようなことがあっても，周囲をぼんやりとながめまわすだけで，またすぐに眠りこんでしまうが，眠りが中断されたときには，明らかに不愉快そうである。日が沈むと，はじめてその行動に変化が起こる。

頭のまわりに巻きつけていた尾を伸ばし，目を見開き，極度に鋭敏な聴覚を保護するために，眠っている間は折りたたんでいた外耳を立て，毛をなめてつやを出し，ようやくその隠れ家から出ていくのである。自然はかれらに，オオヤマネコのように鋭い視覚，コウモリのように敏感な聴覚，キツネなみの嗅覚（きゅうかく）とずるさ，そしてもっともすぐれたサルにも匹敵するような敏しょうさとを与えている。このため，いつでも非常な自信をもって的確に行動するので，小さい動物にとってはつねに危険な存在となっている。こうしたどう猛な特徴によって，かれらは同じ亜目に属している他の大部分の種とは，はっきりと区別されるのである。

原猿亜目の，ほとんどすべての動物たちと同じく，ガラゴ属の動物も１産１子である。雌を買うと，その子が母親の腹や胸に，手と足でしっかりとしがみついている場合がよくある。あまりにしっかりとしがみついているので，なかなか引き離せないほどである。

ガラゴ属のうちで，いちばん大きいものでも，成長しきったウサギの体長よりも小さいくらいであり，もっとも小さいものは，中くらいのネズミと同じくらいである。

次に，オオガラゴについて述べると，これはフサオガラゴとかミミキツネザルとも呼ばれ，頭胴長は20〜30センチで，長さ22〜25センチの尾と，灰かっ色を主調とした毛並みをもっている。それは，アフリカのサハラ砂ばくの南の地域に広く分布している。

甘酒で身をほろぼす

ケルステンの語るところによれば，ザンジバル〔注８〕の住民たちは，ごちそうをわなに，オオガラゴを捕えることができるという。この動物はたしかに高等脊椎（せきつい）動物の暖かい血が大好きだが，甘いものも好きなのである。ケルステンは次のように報告している。

「一般に《ヤシ酒》と呼ばれている一種の樹液が，ヤシの木から流れだしていると，オオガラゴはとびついていってこの甘い液を飲む。液体はすぐに麻酔的な作用を及ぼし始めるが，とくに，この動物が風にふかれているときのききめはてきめんである。この飲み物の作用で，オオガラゴは急速に平衡感覚を失う。そして木から落ち，倒れたままいつまでも動かずにいる。

原住民たちはオオガラゴが意識を失っているうちに拾いあげ，おりに入れるか，足を上にしてなわで縛るだけでいい。あとは町までかついでいって，この動物が大好きなヨーロッパ人たちに売りつけるだけである。

ガラゴは，いったん飼いならされると，しまいにはサルよりもなついてくるが，日中の睡眠を妨げないように注意しなければならない。夜，目がさめているときには，オオガラゴは飼い主に非常に強い愛情を示すが，それはキツネザルほどではない。いろいろなえさを食べるようになれば，この動物を生かしたままヨーロッパへ連れていくことも容易である」

スレンダーロリス
Loris tardigradus

ガラゴ亜科の動物たちが，夜の一定時間活発に動き回るのにひきかえ，ロリス亜科の動物たちは正反対の特徴を示す。いわば，原猿亜目のなかでもなまけものの代表格なのである。《ノロマザル》というあだ名は，それなりの由来があるのである。この科の動物たちは小さくて優美だ。頭部は大きくて丸い。後肢は前肢よりも長いが，いずれも細い。

鼻面はとがっていて短く，目はたがいに近接しており，耳には毛がはえていて，大きさはふつうである。手の第２指はきわめて短いが，第４指はかなり長く，第５指には長くてとがったかぎづめがついている。雌の胸には１対の乳房があり，これらの乳房にはそれぞれ乳頭が２つずつついている。

スレンダーロリスの目の周囲には，必ず暗色の毛がリング状にはえている。鼻と，足のうらの毛のない部分は肉色をしている。森にすみ，家族的な集まりをつくって生活しているが，その小さなグループは，日中は木のほら穴で眠っていて，夕暮れに目をさまし，食べ物を捜しに出かける。それは木の葉や果実などであるが，ときによっては巣の中にいる小鳥や，その卵であることもある。

木から降りてくることはほとんどない。たまたま地上に降りていて敵に出会うようなことでもあれば，気でも狂ったようにあわてふためく。やっかいそうに四肢を進め，たえずよろよろし，ときにはたち止まって後肢で何歩か歩いたりしながら，精いっぱいの速さで敵から遠ざかる。スレンダーロリスは，たしかに歩くのはへただが，木登りは非常にうまい。しかし，木に登るときも不思議なほどのろのろしている。

光をとても敏感にさけるが，夜間は実によく目がきく。その目は，暗やみのなかでは非常に特殊な輝きを帯びる。聴覚もたいへん鋭敏であり，近くで昆虫の羽音がしただけでもすぐに目をさますくらいである。

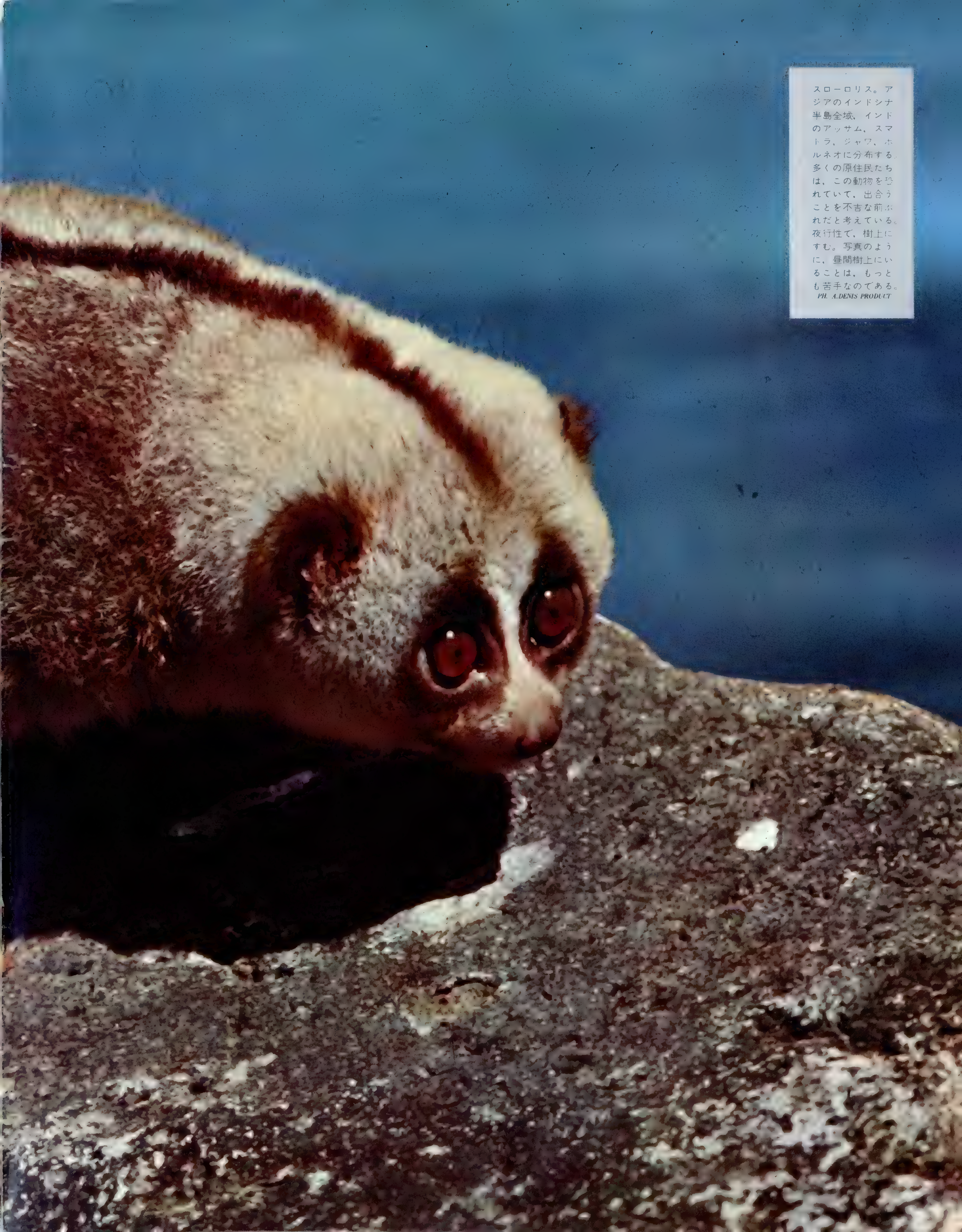
昆虫や小鳥をあさり，前足のひと打ちでみごとにそれらをつかまえる。喜びや苦痛，いらだたしさやあせりの気持などを表わすのに，さまざまな抑揚のある，もののきしむような



メガネザル。いつもびっくりしたような大きな目で，子どもがアメをなめているようにみえるが，じつは，好物のごちそうを賞味しているところである。今晩のいけにえはトカゲ。純天然で，有毒着色剤や人工甘味料の心配はいらないから，メガネザルは幸福だ。

PH. TIME LIFE





スローロリス。アジアのインドシナ半島全域、インドのアッサム、スマトラ、ジャワ、ボルネオに分布する。多くの原住民たちは、この動物を恐れていて、出合うことを不吉な前ぶれだと考えている。夜行性で、樹上にすむ。写真のように、昼間樹上にいることは、もっとも苦手なのである。
PH. A.DENIS PRODUCT



エリマキキツネザル。キツネザル属で，体長はかなり大きい。長い尾をもち，日中活動する習性がある。鼻面がとがり，目が鋭いので，どう猛な感じを与えるが，実際にはおとなしくて人間によくなれる。マダガスカル島の原住民たちは，この動物が毎日太陽を礼拝していると考えている。
PH. J. SMITH

声を発するが，おこっているときにはその音がいっそう高く鋭くなる。

スローロリス *Nycticebus coucang*

スローロリスは，その性格が風変わりなためか，ジャワの原住民たちの間ではきわめて評判が悪い。というのは，原住民たちはこの動物を，危険や病気，不幸や死の訪れの前ぶれだと信じているのである。

ヨーロッパにいてスローロリスを飼ったハッスカールは，その思い出を記している。

「飼育されていると，この動物はひっそりとしていて，ふさぎこみがちに，忍耐強くじっとしている。日中は両手で頭をかかえこみ，すみのほうにうずくまっている。

はじめのうち，わたしはこの動物をなわでつないでおいた。しかし，やがてわたしは，このなわがじゃまになるとでもいうかのように，不平を漏らすことがあるのに気がついた。それにもかかわらず，かれは逃げだそうなどという試みは，まったくしなかった。

飼い始めたころにはかみつく癖があったが，少し懲らしめてやったらかみつかなくなった。なでてやると喜び，目を細くしてわたしたちの手を自分の胸に押しつけるのだった。夜が近づくと目をさまして，目をさましたばかりの人間がするようにまぶたをこする。それから自分の周囲をながめまわし，円を描いておりの中を歩き始める。そして，わたしたちが張り渡しておいた何本かの綱の上を，綱渡りの芸人のように器用に歩き回るのである。

食べ物はどうかというと，本来はとりわけ昆虫や小鳥が好きなのだが，果実や牛乳も好きだった。昆虫や小鳥などの極上料理を出されると，スローロリスは獲物をねらう狩人のように，慎重におりの中を横切り，獲物の30センチくらい手前で立ち止まり，あと足で立って両方の腕を伸ばすと，ぱっとひとととびで獲物に襲いかかり，またたく間にむさぼり食ってしまうのだった」

アイアイ科 *Daubentoniidae*

アイアイ科の動物は，ユビザルの異名でも知られている。それはこの動物が長い間，とくに長い指をもったネズミとまちがえられていたからである。この動物と霊長類との類似性が注目され，さらに突っこんだ解剖学的研究の結果，原猿亜目のなかに分類されるようになったのは，ずっと後になってからである。

この科の特徴は次のようなものである。

- 外観が，原猿亜目より齧歯（げっし）目に近いこと。
- 歯は18本からなり，あごの片側で，上下それぞれ，門歯1／1，犬歯0／0，小臼歯（きゅうし）1／0，大臼歯3／3という歯式をもっていること。
- 門歯が，たえず伸びつづけていること。
- 平づめのある足の親指をのぞいて，他の指がすべて弓形に曲がったつめか，あるいはかぎ形のつめをもっていること。
- 手の，長い第3指が非常に細いこと。

アイアイ科には1属1種しかなく，マダガスカル島に生息するアイアイがそれである。

アイアイ *Daubentonia madagascariensis*

18世紀後半のこと，フランスのナチュラリストのソンヌラは，マダガスカル島西海岸の密林の原産だという2匹の奇妙な動物を贈られた。この小動物がなんであるか，だれも知らなかった。この島の他の地域の原住民でさえ，それを見てひどくびっくりして，《アイ・アイ》という驚きの叫びをあげるばかりだった。ソンヌラはその叫び声を，この動物の名まえだと勘違いしたのだ。

「このけものは」と，あとになってかれは書いている。「リスに似ているが，性質はまったく違っている。その性格のある面からすれば，キツネザルの仲間とも考えられよう。

アイアイの前肢の指は，非常に長くやや弓形に曲がっているため，歩くのは遅い。つめもまたかぎ形に折れ曲がっている。中指の先の2つの指骨は，長くて細く，指のその部分には毛がはえていない。この動物はその指を使って，昆虫を木の割れめから掘りだして食べる。〔注9〕

後肢の4本の指はかぎづめをそなえている。親指には人間のつめに似た平づめがついている。両あごに2本の門歯があり，それらはぴったりとくっついているので，この動物の鼻づらがオウムのくちばしに似ているような印象を与えるほどである。下あごは上あごよりずっとがんじょうである。耳は大きくてすべすべしている。

からだは，密生した羊毛のような毛でおおわれ，その毛はかっ色か黒っぽい色をしている。しかしまた，体毛がもっと細くて，その上に，それよりもはるかに太くて黒い毛がはえているようなのもいる。頭と首の前のほうは黄色がかった白である。尾は扁平で，長い毛で飾られており，つけ根から半分までの毛の色は白い」

ソンヌラは，この動物がどんなところに生息しているかについて，何も記していないが，飼育下におけるこの動物の習性についての貴重な報告を残している。

「日中，この動物に出会う機会はまったくない。アイアイは，ミミズクの目のような，じっとみつめた赤く輝く目をもっている。非常ななまけものであるが，おとなしくて従順である。わたしは自分の家に，雄と雌を1頭ずつ飼っていたが，残念なことにそれは2か月後に死んでしまった。

わたしはコメをたいて食べさせたが，前肢の細い指を使ってコメを口に運んだ。そのようすは，まるで箸を使って食べているようだった。おく病で，しかも寒がりなので，雄雌決して離れないように用心しながら，足を引きずるように移動していた。眠るときには，頭を前肢の間に隠すようにし，横向きにからだを伸ばして寝た。そのままの格好でまったく動かず，身動きさせるには，からだを激しくゆすぶってやらなければならなかった」

世界の珍獣

アイアイは，他の哺乳（ほにゅう）動物たちとはあまり似ていない。ただし，ある面では，ガラゴ属の動物たちを思わせるところがある。

耳が大きいので，なおさら大きく見える頭部。瞳孔（どうこう）はヨザル〔注10〕にくらべればはるかに小さいが，突きでていてじっと動かずきらきらと輝く目。出っ歯のためにオウムのくちばしを思わせる口。尾と同じく，まばらでこわい毛をもった，がっしりした体格。第3指が，長いけれども退化寸前にまでやせ細っているようにみえる奇妙な手。このような形態が，アイアイの特徴である。

アイアイを観察すれば，まさしく夜行性の動物であることがわかるであろう。アイアイは，光を恐れるばかりか，明るいところで目をさましても，ぼんやりして，いつまでもじっと動かずにいる。そして，無意識に隠れ家のほうへはっていき，からだを丸めてうずくまると，尾を頭のまわりに巻きつけて顔を隠してしまう。夕暮れになると，目をさまして隠れ家から出ていくが，少しでも明るいと，また隠れ家に舞いもどってしまう。いざというときには，尾を後方にのばして，非常にすばやく歩く習性がある。

1863年のポーランの記述によると「科学的な見地からみても，アイアイはきわめて不思議な動物である。マダガスカル島の内奥部のタケの林のなかにいて，サトウキビの汁を吸



アイアイ。マダガスカル島にしかいない。
原猿亜目のなかでも，もっとも珍しい動物で
現在，絶滅の危機が叫ばれている。
夜になると，この長い指で虫を掘りだしたり
卵を割って食べたりして活動する。
PH JAQUES STEVENS

うようにタケの樹液を吸う。昆虫（こんちゅう）やその幼虫もきらいではない。食物を得るためには，門歯を使って木の幹に穴をあけ，そこに細い中指を差し入れて，好物の樹液をすくいだしたり昆虫を掘りだしたりする。

明けがたになると，脚（あし）の間に頭を隠し，長い尾をからだに巻きつけるようにして眠りにつく。夜のとばりがおりると目をさまし，軽々と木によじ登り，キツネザルのようなすばやさで枝から枝へととび移り，老木の幹の割れめを注意深く点検する。ときおり，鈍いうなり声に似た鳴き声がこだまして聞こえてきたりする。しかし，夜明けのきざしがあらわれるやいなや，この動物は森の奥深くに引っこんでしまう」

アイアイは今日でもなお，もっとも珍しい哺乳類の1つとみなされている。残念なことに，人間がこの動物の生活環境をこわしつつあるために，この種全体は，いまや絶滅の危機にさらされている。

事実，マダガスカル島の東海岸のアイアイの分布域は，ますます狭くなっている。今後，その分布域はアンタラアとマナンジャリ間にある森林に極限されることになるであろう。1932年以来，かつてこの動物が生息していたマダガスカル島の北西部で，この動物を見かけたという確かな報告はない。このようにアイアイがほろびつつある原因は，森林，とくにこの動物の生活にとって欠くことのできない，海岸近くの森林が破壊されたことにある。そのうえ，アイアイの繁殖のテンポが，どちらかといえば，緩慢であるということも考えに入れなければならない。

したがって，現在自然の状態で生き残っているアイアイは，きわめて数が少なく，もし，適切な処置を下さなければ，数年の後にはこの種は消滅してしまうかもしれない。

さしあたって，マダガスカル島の北東部にある，島全体が禁猟区のノジマンガベという小さい島にこのアイアイを移し，コロニーで保護しようという試みが行なわれている。

インドリ科　*Indriidae*

これまで述べてきた科の動物とは異なり，インドリ科の動物は，体長が中ないしは大型の原猿類である。頭があまり大きくなく，とんがり帽子のような形で奇妙に細長くなっているのが，この科の動物たちの特徴である。目も耳も小さいが，耳は長く，密生した毛におおわれているのがふつうである。どの種の場合にも後肢（こうし）は前肢より長い。尾



スレンダーロリス。
4本の脚を手のように使って
木の枝をゆっくりと移動している。
中央によった大きな目と小さな突きだした鼻が
あいきょうのある顔をつくりだしている。
PH. Z.F.A.



は，種によって，堂々とした大きなものから，単なる痕跡（こんせき）になってしまっているものまである。インドリ科の動物は，本質的に樹上性である。

インドリ科にふくまれている種は，次のような特徴をもつ。

- 体長が大きいこと。
- 歯が，あごの片側で，上下それぞれ門歯2／2，犬歯1／0，小臼歯（きゅうし）2／2，大臼歯3／3，の歯式をもっていること。
- 後肢が，前肢より長いこと。
- 手の親指が短く，他の4本の指と向かい合っていることはまれであること。しかし，足の親指は向かい合っているものが多いこと。
- 植物食であること。

インドリ科（4種をふくむ）は，インドリ *Indri*，シファカ *Propithecus*，アバヒ *Lichanotus*，〔注11〕の3属に分類されている。

インドリ　*Indri indri*

マダガスカル島の原住民たちが，ソンヌラに奇妙な姿をした1頭の原猿亜目の動物をさして，《インドリ！インドリ！》すなわち《ごらんなさい！ あそこをよくごらんなさい！》と大声をあげた。そこでソンヌラは，それがこの動物の名まえであると早合点して，インドリという名をつけたのだった。

インドリは，手や足や指もふくめて，からだ全体が密生した羊毛のような毛でおおわれているが，顔には毛がなく，黒っぽい皮膚をしている。頭の上と背面部および脚（あし）は黒かっ色の毛並みで，額，のど，胸，尾，わき腹，およびかかとでは毛が白色になっている。

インドリは原猿亜目の動物のなかでは，いわば真猿亜目のなかの類人猿にあたるものとみなすことができる。頭は，そのがっしりした体格にくらべるとやや小さい。鼻づらはとがっており，前肢は，後肢よりはるかに短い。手のひらと足のうらは長く，他の4本の指と向かい合った長い親指がある。1枚の皮膜が，親指もふくめた5本の指を，そのつけ根から半分くらいまでつないでいるので，手は枝などをにぎるのに非常にぐあいがよい。

目は小さく，耳もそれほど大きくないうえに毛で隠されており，それがインドリの1つの特徴となっている。

ソンヌラは，インドリが非常に敏しょうに動き回ると語っている。木から木へ軽々ととび移り，リスのようにすわってものを食べる。果実，種子，木の芽などが，その主たる食物である。

シファカ。
マダガスカル島にいて
インドリ科に属する敏しょうな動物で
驚くほど離れた木から木へと平気でとび移る。
人間にはなつかず，飼うことはできない。
PH. F. AYER

その声は幼児の泣き声を連想させる。性質がおとなしいので，飼いならすのは実に容易である。

マダガスカル島の住民たちにとって，インドリは神聖な動物である。原住民たちは，この動物のなかに超自然的な存在を認め，自分たちの祖先の魂(たましい)がこの動物の体内に宿っていると信じている。また，インドリが止まった木は不治の病いをなおす力があると信じられている。だから原住民たちは，心をこめてその木の葉を摘むのである。

インドリを投げやりで攻撃するのは，きわめて危険なことだとも原住民はいう。というのは，インドリがとんでくるやりを逆に攻撃した者に命中するよう，投げ返すすべを知っていると信じているからである。

キツネザル科　*Lemuridae*

古代ローマ人たちは，死者の魂を《亡霊》（レムール・lemures）と呼んでいた。よい霊は家の守り神として，家とその家の人を守り，悪霊(あくりょう)はいたずらの好きな妖精(ようせい)に姿を変え，哀れな人たちを苦しめていると思われていた。そして，この悪霊をなだめるために，真夜中にお祭り騒ぎをするのがならわしであった。

ナチュラリストたちが，夜の間活発に活動するある種の動物たちを《亡霊科・*Lemuridae*》と命名したのは，こうした理由によるものである。

今日では，キツネザル科に属する動物だけがそのように呼ばれており，この科の動物のすべてにわたって見られる特徴は，次のとおりである。

- 頭胴長は中くらいか，もしくは小さめであること（12～44センチ）。
- 鼻づらが突起していること。
- 歯の数は36本で，あごの片側に，上下それぞれ門歯２／２，犬歯１／１，小臼歯（きゅうし）３／３，大臼歯３／３の歯式をもっていること。
- 後肢（こうし）が前肢より長いこと。

キツネザル科の動物は，一般に木の上で生活し，夜行性である。日中活動し，地上で生活するワオキツネザルは例外である。

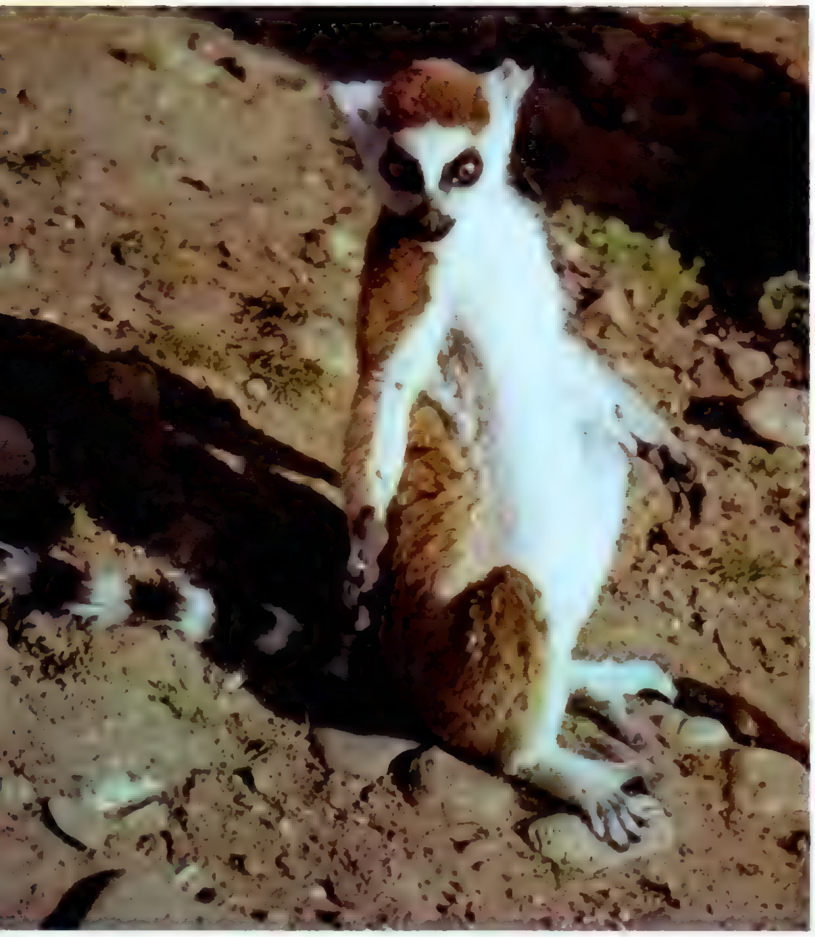
キツネザル科は２亜科に分かれ，イタチキツネザル *Lepilemur*，キツネザル *Lemur*，ハイイロキツネザル *Hapalemur*，ファナー *Phaner*，マウスキツネザル *Microcebus*，コガタキツネザル *Cheirogaleus*，の６属をふくみ，それらは16種に分かれている〔注12〕。次にワオキツネザルとファナーについて述べよう。





ワオキツネザル。
これは動物園での写真だが
野生状態では，湿った岩場にすむ。
アーチ状のしまの尾はこの動物の特徴である。（上）
PH. P. VARIN-JACANA

マウスキツネザル。
乾期には冬眠に似た状態に陥るのが特徴で
この期間は，尾のまわりにたくわえた
皮下脂肪を消費して生きている。（下）
PH. OKAPIA





ワオキツネザル。
カンガルーに似たすわり方をしているが
これも，ワオキツネザルの
得意のポーズである。(上)

PH. J. KLAGES

マングースキツネザル。
マダガスカル島北部に生息している。(下)

PH. ATLAS-LENARS

キツネザル亜科　*Lemurinae*

全般的にみて，キツネザルの頭はキツネの頭によく似てとがっており，目は大きい。体長は中くらいで，耳には非常に毛が多く，四肢（しし）の形は美しく，その長さはほとんど等しい。上あごの門歯は一般に小さいが，下あごの門歯はとがっていてほとんど横向きにはえている。頭骨は細長くて，うなじのところで丸くふくらんでいる。

野生のキツネザルの生態について，はじめて正確な記録を残したのはポーランである。

日中，これらの動物たちは，深くおい茂った樹林の木のほら穴にひそんでいる。しかし夜のとばりがおりるやいなや，非常に特徴のある鋭い鳴き声で，自分の動作に拍子をつけるようにしながら，えさを求めてとびだしていく。

通常，キツネザルは６頭，８頭，10頭ないし12頭で群れをつくり，小さい動物やナツメヤシの実を食べる。木から降りるのは，落ちた実を拾うときくらいである。

日が沈むころ，いっせいに，哀調をおびた鳴き声を発することもある。その動作は軽快で敏しょうである。完全に目がさめているときには，驚くような跳躍力で，こずえからこずえへと，途方もない距離をとび越えていくようだ。

キツネザルの肉は，ウサギの肉のようにおいしく，珍味の１つとされている。キツネザルに近いほかの種の動物たちは，神聖なものとしてそっとしておかれるのに，キツネザルだけが，なんの害もないのに原住民の狩りの対象とされているのは，おそらくそのためであろう。

キツネザルは，見ていれば楽しく，愛らしくもあるが，他の原猿亜目の動物と同じく，それほどすぐれた知能をもってはいない。一般におとなしくもの静かで，喜んで愛撫に身をゆだねているが，飼い主に特別なつくことは決してない。飼い主に対するこの態度は，キツネザルがその周囲にいる一般の人びとと自分の主人とを，まったく区別していないことをはっきりと示している。

ワオキツネザル　*Lemur catta*

ワオキツネザルの大きな特徴は，体形が美しく，調和のとれていること，毛の色が美しいこと，尾が壮麗で，リング状のはん紋をもち，からだよりも長いこと，そして目が比較的大きいことなどである。全長は85～90センチに達するが，そのうち体長はわずか40センチで，残りは尾の長さである。

密生していて柔らかく，いくぶん羊毛のような毛並みは，多少の差はあるにしても，赤銅色の光沢をもった灰色をしている。目は鼻づらと同じく，大きな黒い輪に取り巻かれている。

ワオキツネザルは，他のキツネザルと違って日中活動する動物である。また木の上と同様，地上でも好んで活動する。マダガスカル島南西部の森のなかにすんでおり，その動きは活発で優美である。木から木へと非常に軽快にとび移るが，そのとき，イエネコの鳴き声を思わせるような独特の鳴き声をだす。

コガタキツネザル亜科 *Cheirogaleinae*

ファナー　*Phaner furcifer*

ファナーは，他のキツネザルとはまったく別のグループに属している。

これは，頭胴長約25センチの小さな動物で，ほかに30センチの長い尾をもっている。からだつきはすらりとしており，頭部は小さく，鼻づらは鋭くとがっている。前肢（ぜんし）は短く，後肢はふつうの長さである。目は大きい。毛並みは柔らかく羊毛のようで，淡い黄みをおびた灰かっ色と赤かっ色の混合色である。黒いしまが目のまわりを取り囲み，背面部にもはっきりとついている〔注13〕。尾はつけ根のところが白く，先のほうでは暗色になっているが，全体に毛が濃い。顔と手には，ごくまばらにしか毛がはえていない。

この動物は，マダガスカル島西部の森林地帯に多くいるが，島の東側の地域にもいる。「夜になるやいなやファナーは，日中眠っていた隠れ家から出てくる。ファナーの隠れ家は一般に，ある種の木のほら穴で，出入口が２つある。ミツバチのすんでいるほらを利用することもある。そんなときは，ハチと自分との間に，用心深くわらや木の葉をたくさん置いておく。原住民も，ファナーは蜜が大好きで，ミツバチの巣によくいくという。

ファナーの夜間の行動をいろいろと観察したところ，キツネザルよりずっと陽気である。驚くような跳躍力を見せることもある。目をさますと，《カアカカ》というような鋭い叫び声をあげるが，それはシチメンチョウの鳴き声を思わせる」と，ポーランはいっている。ファナーをつかまえることは，きわめてむずかしい。







ワオキツネザル。(左上)
マウスキツネザル。(左下・右)
マウスキツネザルはキツネザル科の動物で頭胴長
10センチあまりの最も小さいサルである。
マダガスカル島の東部と西部の森林にすむ。

PHIJ. WAGNER-JACANA F. PETTER J. J. PETTER

8−19



クロキツネサルの雄。
雌は、もっと明るい毛の色をしている。
体長はネコくらいにまでなる。

PH. H.VIBLE

カラーページ解説

ニホンザル

伊谷純一郎

ニホンザル *Macaca fuscata*。このラテン名の fuscata は，黒っぽいという意味だが，この種の特徴を一口でいうならば，顔と尻が赤く，灰かっ色の毛をもち，尾の短いサルということになる。

日本の特産種（日本にしかいない種）で，オナガザル科マカック属に属する。本州，四国，九州，屋久島（鹿児島県）に分布し，屋久島産のものはヤクニホンザル *M.f.yakui* として別の亜種とされている。わずかに小型で，四肢（しし）は短く，顔の赤さがややさえない。

ニホンザルの分布の北限，下北半島が，ヒトをのぞくすべての霊長類の北限でもあることは，第6号解説において紹介した。照葉樹林帯により多く生息するが，零下20°Cに達する深雪地帯にもよく適応した種として有名。体重は10キロあまりに達し，頭胴長は約80センチ，尾長6～8センチ。歯式は2／2，1／1，2／2，3／3。冬季約3.4か月間のはっきりとした交尾期をもち，出産期は5～8月で1産1子。雌は3.5歳，雄は4.5歳で性的成熟に達する。寿命は約25歳と考えられるが，約40歳という記録もある。

食生活

ニホンザルの全頭数は，全国で500群内外，約5万頭と推定される。そのうちの30数群は餌づけされており，観光，社会教育，研究などの対象になっている。

日本人にとって，ニホンザルは古くからなじみ深い動物で，古代においては埴輪，また近世においては俳句，詩歌，絵画，民話などの対象として親しまれてきた。地方によっては，サルと呼ぶことを忌み，ヤマノタイショウ，エテ，ワコ，キムラ，ゴンなどの呼び名がある。

その生態の研究が始められたのは，1948年であり，1952年には宮崎県幸島，大分県高崎山の群れが餌づき，研究は急速に進んだ。

食性は雑食性であるが，けものや鳥を捕食したという例は知られておらず，植物，昆虫，甲殻類，貝類などが主である。群れによって食物が異なり「食物」と「食物でないもの」の認知は，生後獲得（習得）的なもので，しかも伝承的なものであることが明らかにされた。セミ，甲虫（こうちゅう）類，ミノムシ，バッタなどを好み，群れによってはサワガニ，エビ，ジンガサガイなどを食べる。植物性食物については，いくつかの群れについての詳細な記録があるが，諸種の果実，種子，穀類の実をはじめ，木や草の芽，葉，花，根などの各部分に及ぶ。積雪地帯のニホンザルの冬季間の主食は落葉樹の樹皮である。

群れの社会性

群れは，ほぼ10平方キロ以内の安定した遊動域をもち，季節の食物に応じて，週期的な遊動を行なう。1つの群れの遊動域は，多くの場合，隣接群の遊動域と一部で重複しており，2～5群が地域的集中をなしている場合が多い。群れの大きさは30～150頭であるが，餌づけされた群れでは，高崎山の群れのように1000頭に達するものもある。

群れの構成は，複数の雄とその1.5～3倍の雌，およびその子どもからなる。群れの中心部を，雌と子ども，および少数のリーダー格の雄が占め，若い雄たちは，その周縁を取り囲むという同心円構造をもつ。中心部はさらに母子関係で結ばれた血縁グループの集合からなっている。雄のあいだには厳格な順位を認めることができ，かれらはこの規律を守って，リーダー，サブリーダー，周縁部の雄など，群れのなかで占める位置と役割によって，いくつかのクラスに分かれる。

雄たちのあるものは，性的成熟に達すると群れを離脱し，単独生活を営むようになる。これをひとりザルと呼ぶが，雄の大半は群れを離脱し，放浪ののち他の群れにはいる。このように雄は，群れのあいだの社会的関係を保つのにきわめて重要な役割を果たしている。

かれらは複雑な音声をもっている。音声の30数種が分類され，その社会的な機能も明らかにされている。それらは近距離伝達用，遠距離伝達用の音声に分けられるが，前者は個体間の社会的調整に，後者は群れの統合に役だっている。

社会的なやりとりの手段としては，音声よりも行動のほうが発達していて，プレゼンティング（劣位者の示す行動で雌の交尾姿勢に似る），マウンティング（優位者の示す行動で雄の交尾姿勢に似る），毛づくろいなどという行動をめぐっては，複雑な個体間のかけひきを見ることができる。群れにより，行動に違いのあることは食性でも述べたが，イモを洗う行動，その他，いわゆる“文化的行動”の伝播と伝承の機構についての，詳細な分析がなされている。■

原猿亜目の分類

このシリーズでは，第3号の解説でも述べたが，原猿亜目のなかからツパイ *Tupaia* がのぞかれている。このグループを霊長目に入れるか，食虫目に入れるか，または独立したメノティフラ目 *Menotyphla* を設けるかは議論の多いところである。今日では，中耳の骨の形態，目が大きいこと，親指と他の4本の指との対向がある程度可能なこと，および脳の形状などから，霊長目のなかのもっとも原始的なもの，ツパイ下目 *Tupaii formes* として原猿亜目のなかに位置づける学者が多い。ツパイ下目をふくめた原猿亜目の分類表を，下に掲げておく。■

亜目	下目	上科	科	現生種（例）
原猿亜目	ツパイ下目		ツパイ科	コモンツパイ
				ハネオツパイ
	メガネザル下目			フィリピンメガネザル
	ロリス下目	ロリス上科	ロリス科	スローロリス
				ガラゴ
	キツネザル下目	キツネザル上科	キツネザル科	コビトキツネザル
				ワオキツネザル
			インドリ科	インドリ
				シファカ
		アイアイ上科		アイアイ

カラーページ注

〔注1〕**ヤマネ**　齧歯（げっし）目ヤマネ科の哺乳動物。日本産のものは頭胴長約8センチに，尾長約5センチで，冬眠をする。原猿亜目のなかのみならず霊長目のなかで，もっとも小さいのは，マウスキツネザルで，頭胴長は約10センチ，体重は数十グラムで，日本産のヤマネほど小型ではない。

〔注2〕**原猿類の眼窩**　下等哺乳類の眼窩は側方で切れているが，真猿類では半球状をなしている。原猿類のはその中間形で，眼窩の外輪は完成しているが，側後方に間隙がある。

〔注3〕**歯の退化**　霊長類の進化の方向性の1つとして，歯の退化の傾向をあげることができる。真猿類は，広鼻猿で32本と36本，狭鼻猿は32本であるが，本文に出てくる原猿類は基本的には36本の歯をもっている。しかし，グループによって種々な特殊化，あるいは退化の傾向を示しており，もっとも少ないのがアイアイの18本，次いで，インドリ科の30本，イタチキツネザル属 *Lepilemur* が32本，メガネザル科が34本，ロリス科とキツネザル科は36本と，変化に富んでいる。

〔注4〕**原猿類の活動時間**　原猿類のうち，メガネザル科，ロリス科，アイアイ科はすべて夜行性であり，インドリ科とキツネザル科のなかには，種によって夜行性のもの，昼行性のもの，早朝と夕方とにだけ活動する薄暮活動型のものがある。

〔注5〕**原猿亜目**　この5科のほかに，最近ではツパイ科 *Tupaiidae* を加えるのがふつうである。この動物は，過去において食虫目にふくめられたり，また食虫目と霊長目との間に位置する独立した目と考えられたりしたが，今日ではこれを霊長目のなかに入れ，霊長目のもっとも原始的なグループとする研究者が多い。東南アジアの産で，一見リスに似ているのでリスモドキの別名がある。

〔注6〕**ハリツメガラゴとガラゴ**　この2つの属は，ロリス科のなかで活発な行動をするグループで，ともにアフリカに分布し，前者は1種をのぞいて森林性，後者は主としてサバンナ性である。

〔注7〕**ロリス科の第2のグループ**　これらの4属は，ロリス科のなかでも，動作の緩慢なグループで，前2者はアフリカに広く分布し，後2者はアジアの産である。

〔注8〕**ザンジバル島**　東アフリカのタンザニア国，その首都ダルエスサラームの沖合いに浮かぶ小さな島で，この島にはオオガラゴの1亜種が分布している。スワヒリ語では，コンバと呼ばれている。

〔注9〕**昆虫を木の割れめから掘りだす**　最近，J.J.ピテによって，アイアイの生態が詳しく観察され，その行動が撮影された。ピテによると，アイアイは長い指で，ちょうど医者が患者の胸部を打診するようにして，木をたたいてその内部に巣くっている虫を探知し，次いで，鋭いつめをさし入れ，つめでかきまわすようにして虫をつぶし，それを引きだして食べるという。

〔注10〕**ヨザル**　第7号に出てくる南アメリカ産のオマキザル科のサル。このヨザルは，真猿類中唯一の夜行性のサルである。学名は *Aotes trivirgatus*。

〔注11〕**アバヒ**　アバヒに対するリカノトゥス *Lichanotus* という属名は，今日では，ふつうアバヒ *Avahi* を用いる。

〔注12〕**キツネザル科**　これらの6属は，2つの亜科に分かれる。前3者がキツネザル亜科に，後3者はコガタキツネザル亜科に属する。一般に前者はより大型，後者は小型である。

〔注13〕**ファナーの名称**　この特徴のためにファナーは，フォークキツネザル（fork-marked lemur）とも呼ばれている。■

（伊谷純一郎）



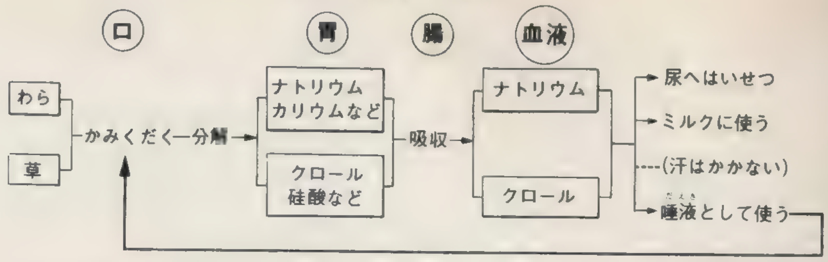
のどかに草を食べる乳牛　そまつなえさは栄養価の高いミルクにつくりかえられる。

草食動物と〝塩〟

大森昭一朗

人間が生きていくために，欠くことのできない〝塩〟。それは，動物にとっても同じことだ。

ウシの消化：塩のコース



もし，毎日の食事から塩けがなくなったら，われわれの食生活はまったくあじけのないものになってしまう。しかし，塩は調味料として貴重であるばかりでなく，人間が生きていくために，不可欠の栄養素でもある。化学的にはナトリウム（Na）とクロール（Cl）の化合物だが，これらの元素は生理的に非常にたいせつな機能をもっている。

これらが不足しはじめると，まずからだがだるく，疲れやすくなるといった症状がみられるが，さらに少なくなると体内の浸透圧が変わって，組織に浮腫（むくみ）ができてくる。また，血液中にナトリウムが欠乏すれば，血液は酸性になって流れが悪くなり，クロールが欠乏するとアルカリ性になって呼吸困難を引き起こし，ともに生きていけなくなる。

草のなかからとる塩

人間はいつの時代からか，このたいせつな無機物を「塩」のかたちでとることを覚え，今では塩の貴重さを感じない生活をするようになった。しかし，人間以外の動物では，塩を利用することができるものはむしろ少ないのである。

草食動物もその例外ではなく，原野を走りまわっていても，塩にお目にかかれる機会はきわめてまれである。しかし，塩を必要とすることは，われわれ人間とまったく同様である。つまり，これらの動物の血液のなかにもナトリウムとクロールが人の場合とほぼ同じ程度ふくまれており，その生理的な働きも人の場合と変わりはない。

塩をとれない草食動物はこれらの元素を植物のなかからとらざるを得ないが，一般に植物体はナトリウムが少なく，カリに富んでいるのが特徴である。その比率は1：5ないし1：20で，土地の性質によって，たとえば，荒地や山地にはえる草のなかにはナトリウムの含量が極端に少ないものもある。したがって，このような地域にすむ草食動物はときにナトリウムの欠乏に悩まされることがある。古い文献によると，旅行者の靴やウマの鞍をさかんにしゃぶるウシの話や塩分を求めて海岸まで旅をしたヒツジの群れの話が紹介されている。

人間は手近にある塩から，また肉食獣は自分の倒した動物の血液などから，比較的簡単にナトリウムとクロールをとることができるが，草食動物は苦労して草のなかのそれをとらなければならない運命にある。このためか，草食動物は草の無機物をうまく吸収する一方，この塩分をできるだけじょうずに利用する機能をもっている。たとえば草食動物は，例外のウマをのぞいて，汗腺（かんせん）が発達していないので汗をかかない。汗をかくと，たいせつな水分と塩分が失われてしまうからだ。

草原ではみずみずしい青草がいつも繁茂しているとは限らないから，草食動物はからだの知恵によってたいせつな塩分と水分をうまくたくわえていく。さらに草食動物は，われわれ人間が利用できない草を消化して，たいせつな，ミルクや肉につくりかえる能力をもっている。たとえば，ニュージーランドのように肥沃な放牧地では，ジャージー種の乳牛は塩やカルシウムなどを補給しなくとも，草だけ食べて1日に20〜25リットルの牛乳を生産することができるのだ。

草を消化する機構

草食動物は草の栄養素を有効に利用しなければならないが，そのために特別な消化機構や代謝機構が存在している。ひとくちに草食動物といっても，草を消化，吸収する消化管の構造はウマとウシとでも非常に違っている。ウマ，ロバなどは単胃で胃が1つしかないが，ウシ，ヒツジなどは複胃で4つの胃をもっている。また，ウマは前歯が上下ともそろっているが，ウシの上あごには前歯がない。

ウシ，ヒツジ，ヤギなどは反芻（はんすう）動物と呼ばれるが，これは，飲みこんだえさをもう一度口にもどして咀嚼しなおす（反芻）習性があるためである。このようにウマとウシをくらべても，消化管の構造・習性に大きい相違がみられるが，草を消化するというしくみについては多くの類似点がある。

草の成分にはたんぱく質，炭水化物，無機物のほかに非常に消化しにくい繊維質（セルロース，リグニンなど）が多くふくまれている。草を消化するためには，この繊維質を分解しなければならないが，草食動物の臼歯（きゅうし）はこの繊維質をかみくだくのに適した形をしており，あごの筋肉もよく発達している。もちろん，歯の物理作用だけでは繊維質の破壊だけで，消化するまでにはいたらない。第2のもっとも特徴的な消化は微生物の働きを利用する点である。



アフリカの草原の草食動物──グラントシマウマ（右）とウシカモシカ　ゴンゴロ火口動物保護区にて　撮影（上も）田中光常

哺乳（ほにゅう）動物は一般にセルロースを分解する酵素をもっていない。しかし，草食動物の消化管内にいる微生物のあるものは，繊維質を分解する強力な酵素をもっている。草食動物が草を利用できるのは，この微生物との巧みな共同作業によるものである。

ウマやウサギは非常に大きい盲腸をもっているが，このなかの微生物群が草の繊維を分解している。ウシ，ヒツジなどの反芻動物では第1胃と呼ばれる大きい胃にいる微生物が草の消化を担当する。ヤギが紙を食べる図は漫画にもでてくるが，実際，かれらは紙をよく消化することができるわけだ。

草食動物は微生物の助けを借りて草を消化しているが，動物の側からも微生物の増殖を助けるための巧妙なしくみがみられる。その好例がウシの唾液（だえき）である。

ウシやヒツジの第1胃内には，内容物1グラム当たり約100億の細菌と約100万に近いプロトゾア（原虫類）が生活していて，第1胃内発酵と呼ぶ消化活動を行なっている。微生物群は1つの社会を構成し，えさが一定であれば，その構成員はほぼ一定しているといわれる。

これらの微生物は，草のなかにふくまれている繊維質やでんぷん質をさらに細かく分解して，酢酸などの酸をつくり，この酸は，第1胃から吸収されて肝臓を通り，血液によって運ばれてからだのなかで利用される。この酸は，ウシが成長したり，乳を生産したりするのに必要なカロリーの60〜80パーセントを占めるという重要なエネルギー源となっている。

ウシは第1胃のなかで，このように多量の酸を生産しているが，もしも酸が多くなりすぎたりすると，そのために微生物群は死滅してしまい，動物は草を消化して生活することができなくなってしまう。この酸を中和するために，ナトリウ

野生動物こんにちは　5

くずれ落ちる巨ゾウ

われわれを，アフリカのゾウ狩りに案内してくれたのは，ムー・ジョンジョン（背の高い狩りの名人の意）である。

本名，ヴァロン・フォン・アルベンスレーベン。ドイツ人。57歳。青年時代からアフリカに渡り，以来30年，プロ・ハンターとしてアフリカじゅうを歩き，今では妻と2人きりで，モザンビークの首都ロレンソマルケスの港の見える豪華な邸宅にゆうゆうと暮らしている。

わたしたち一行が，そのムーに連れられてサバンナ草原に向かったのは，乾期の6月はじめ，モザンビークは真冬の季節であった。

豪勢なキャンプ生活

昔はどこでも狩猟ができたのだが，現在では，やたらと獲物を殺すことは，法律で禁じられている。わたしたちも，撮影のためにどうしても殺さなければならない動物の数を登録し，税金を支払って，ムーの所属するサファリ会社（ハンティングを楽しむ客のために，白人プロ・ハンターをつけて，旅行いっさいの世話をする会社）の狩猟許可地へいくのである。わたしたちは，その許可地のメーン・キャンプまで，ロレンソマルケスから車で丸2日間走りつづけた。

そのメーン・キャンプは，まるで天国だった。それもそのはず，世界の大金持ちが楽しむスポーツというだけあって，私たちの宿泊する小屋は屋根は草ぶきでも，内部はツイン・ベッドに三面鏡，洋服ダンスがそなえつけてあり，赤と白の配色もあざやか。朝になると，現地人が洗面の水を運び，夜には沼の水を消毒して沸かしたシャワーを用意してくれ，洗たくものは，毎日下着までアイロンをかけてくれる。料理人の腕まえもみごとで，バッファロー（野牛）やインパラ（カモシカの一種）のステーキの味はまさに絶妙。これこそアメリカ人好みの，大自然のなかの文化生活であった。

わたしたちは，そこで毎日シマウマや，美しく跳躍するインパラを追いかけたり，ワイルドビースト（ウシカモシカ）やバッファロー狩りをして，サバンナ（草原）を走りまわった。また夜は，キャンプの庭で満天の星のなかに南十字星をさがし，たき火を囲んでムーの話に耳をかたむけるのだった。だから，プロ・ハンターは鉄砲がうまいばかりでなく，3か国語から4か国語を自由にあやつり，話題も豊富で酒も強く，ときには恋占いのひとつもして，女性客を楽しませるようでなければつとまらない。

ゾウ群を求めて

ようやくゾウ狩りの日がやってきた。ムーはわたしたちを毎日退屈しないように楽しませながら，その間に現地人を使ってどこにゾウの群れがおり，どの方向に移動しているのかを調べていたのだ。

ゾウはつねに集団で，えさとなる草木と水を求めて移動する。水を飲むのは，明け方と夕方で，昼間の暑い間は森林のなかで休んでいる。ハンターがかれらと対決するのは，ほとんどえさを食べているときなのだ。しかし，こんどの対決は，ムーにとって危険きわまりない。なぜならば，客にゾウを撃たせればすむものではなく，ムーとゾウが真正面に向き合い，1発でそれをしとめるところを撮影させなければならないからだ。そのため，ミガゲロというもう1人のプロ・ハンターをつけ，ムーとわたしたちを護衛させることにした。

2人のハンター，足跡を追う現地人のヨハネス，銃持ちや連絡係，ポーターなど一行15人は，早朝4時，2台の車に分乗してキャンプを出発した。2時間ほど走って車を降り，こんどは徒歩で進むことになった。



ムー・ジョンジョンたちは麻酔銃を使って子ゾウを生けどった。

森林を通りすぎ，サバンナに出たところで先発の連絡員に出会った。この先の林にゾウの群れがおり，ムーとヨハネスはすでに群れの近くで待機しているという。わたしたちは，サッと緊張した。

恐怖のあとの虚脱

絶対にしゃべらないこと，音をたてないこと，最初はムーとミガゲロ，弾持ちのヨハネスとカメラマンだけが前に出て，残りの者は後方に待機し，1発の銃声を聞いてから前に出ることなどの注意を受けて，私たちは林のなかへはいっていった。

20分ほど歩いて，ムーの指さす方角を見ると，木の間からちらっとゾウの姿らしいものが見え，バリバリと木の葉を食べる音も聞こえてくる。ムーがウィンチェスター2連銃にマグナム475を装塡，だれの顔にも緊張がみなぎった。ムーとカメラマンらが前進。ゾウの群れもわれわれに気づいているのか，木の葉を食べる音はやみ，ザワザワと木立ちの揺れ動く音にかわった。

すると突然前方20メートルの林のなかから，1頭の巨ゾウがおどりでた。瞬間，1発の銃声がサバンナにとどろきわたり，「シアーン」というゾウの叫び声が聞こえた。あたりはにわかにざわめきたち，わたしは夢中で走りだして，銃を構えるミガゲロの後ろにかがみ込んだ。

バリバリと木立ちを折る音。「シアーン」という叫び声。耳をつん裂く銃声。そのうちに，林のなかから14, 5頭ものゾウの群れが走りだしてくる。先頭のゾウがハナを高くもち上げて，カメラマンをめがけて突進。再びムーの銃が火を吹いて弾丸をたたき込む。ゾウは両前足をガクンと折り，前のめりになってくずれ落ちた。

やがて，サバンナに静寂がもどってきたころ，気がつくと全員ぺたりとすわり込んでいた。そして，ムー・ジョンジョンは，頭をたれたまま，ジッと動かなかった。■

（NTV「すばらしい世界旅行」・日野成道）

ムが必要でなる。

ウシの唾液のなかには，ナトリウムが炭酸または重曹の形で多量にふくまれており，これが第1胃で生産された酸を中和している。

ウシは1日に約50～90リットル，ヒツジは約5～13リットルもの多くの唾液を分泌（ぶんぴ）するが，それは第1胃内の微生物の生活を助けるために役だっている。ウシの唾液はだらだらしていて，しまりのないものの代名詞となっているが，見かけによらず重要な役割を果たしている。草から集めたたいせつなナトリウムは，微生物の働きを助けるためにも使われているわけである。

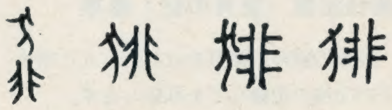
第1胃内微生物には，このように酸を作る働きのほかに，そまつなえさから栄養価の高いたんぱく質やビタミン類を合成する働きもある。このようにして作られたたんぱく質はからだに吸収され，さらに乳房で栄養価の高いミルクに作り変えられる。

草食動物は長い間きびしい自然環境のなかで，有力な攻撃手段をもたずに生存してきた平和的種属であり，また，人類との関係がもっとも深い動物であるが，その環境に適応する能力や草を利用する機構については，まだまだ多くの未知の分野を包含している。■

（農林省畜産試験場場員）

漢字のふるさと　5

藤堂明保



狒狒（ひひ）　ハッと目をむくほどの赤さで，まっかな顔をしたサルである。「非」とは，左と右とに開いた羽の姿を描いた字である。だから，手を左に右に払って，イヤイヤと拒否することを非（あらず）という。また，さっと左右に開くトビラを扉（ひ）という。わたしたちは，度胆をぬかれるほど鮮かな色を見たとき，ハッと左右の目を見ひらいて，あっけにとられる。このような，目をむくほど赤い色を緋（ひ）という。「緋おどしの鎧」とは，この真紅の糸で連ねた華麗なる鎧である。

「狒」は，この緋と同系のことばである。サルの顔とお尻は赤いものだが，とりわけ狒狒の顔は，あっと目をむくほどに赤い。むかし華南の山地を開拓していった中国人は，この鮮血したたるような顔に出会って，胆をつぶしたことであろう。■



田中光常
動物写真のポイント

8. 選択

1つのもので貫きとおせ

レッサーパンダ
（多摩動物園）
35ミリカメラ
レンズ 200ミリ
フィルム SSS
F5.6 1/250

近ごろはあまりにも物が多すぎる。雑誌の広告やカタログなどにある，カメラでも，レンズでも，フィルムでも，種類が多すぎて，むしろ困ってしまうくらいだ。

被写体が〝動物〟のように，動きの早い，チャンスの少ないものは，写すときに，あれこれ迷ったり，操作をまちがえたりしていては，いくら努力をしても，そのかいがなくなってしまうだろう。広角から望遠まで，各種類のレンズをそろえながら，肝心の被写体を目前にしてオタオタと迷いに迷い，ついに1枚も写せなかったという人の例をたくさん知っている。

それよりも，まず手近のレンズで写したうえで，さらにあのレンズがあれば……と，その必要性を痛感してこそ，次の機会にその経験を生かすことができるのではなかろうか。カメラ，フィルムすべてしかり。1つのものを使いこなしてから，次を選ぶことが望ましい。上達進歩の早道は，こんなところにもありそうな気がする。■

ペット相談室



担当
前川博司
（日本動物愛護協会附属動物病院院長）

〈問〉 子イヌがお尻を床につけて，すべるように動くことがありますが，どうしたのでしょうか。（浦和市・町田栄二）

〈答〉 イヌの肛門（こうもん）のすぐ内側には，小さな穴があいています。これは，肛門嚢腺（のうせん）という袋状の腺の入り口で，特有の臭気をもった分泌（ぶんぴ）物を出しています。この分泌物が袋にたまり過ぎたり，出口がふさがれたりすると，かゆみや痛みが出てきます。こんなときに，イヌは尻をこするのです。肛門を周囲から広くつまむように強く押すと，中の分泌物が押しだされて，それでなおってしまうものが多いのですが，たまり過ぎると再発しますから，ときどきしぼり出してやることです。

細菌感染を受けて嚢が炎症を起こしたり，化膿したりするとひどくはれて，肛門の左右に穴があいて，膿や血が流れでることもあります。こうなったものは，専門医に診せてください。

ただれや，傷が尾のつけ根にできたり，肛門の周囲に皮膚病ができたり，下痢や便秘したり，便が毛についたりしたときも，尻をこすって歩きます。腸内にイヌジョウチュウが寄生すると，虫のからだが節のところで切れて，ウリの種の形をした体節になって，肛門から出てきます。イヌジョウチュウには専門の薬を与えますが，2,3週の間隔で2,3回続けて駆虫しないと取りきれません。■

〈問〉 1歳の雌ネコですが，2週間ほど前から顔の毛が薄くなり，とてもかゆがります。最近，額や頭のほうにひろがり，厚ぼったいしわができ，ふけも出はじめました。（金沢市・藤井房子）

〈答〉 ネコの皮膚病の原因はたくさんありますが，ご質問の場合は特徴ある症状です。やがて脱毛した皮膚はかたく厚く弾力がなくなり，白っぽいしわだらけになり，かくと，ふけや毛がたくさん落ちるようになるでしょう。こうした症状は，皮膚のなかに寄生するダニによって起こります。そのままにしておくとしだいに全身にひろがり，かゆみで眠ることができず，全身衰弱で死にます。

治療は患部を中心に広く毛を刈って，殺虫剤を塗布します。目の周囲は，薬がはいらぬよう油性の眼軟膏を点眼してから塗ります。1，2日おきに薄く広く塗布し，毛が伸びたら再び刈って塗布します。軽いものなら3，4週間でなおるでしょう。硫黄泉で薬浴するのもよく，六一〇ハップの300～400倍液に3，4日おきに入浴させ，そのまま流さずかわかします。かゆみが遠のいたらいずれも間隔をあけて，皮膚がすっかり健康状態になるまで続けます。薬も塗り過ぎると，薬焼けして皮膚炎を起こしますから注意してください。疥癬にかかったネコを抱いている人にも伝染し，じんましんのようになってかゆくなります。■

仲間のひろば

5本足のウシ

小さなツアーに参加して，東南アジアを駆け足でまわってきました。ジャカルタの飛行場で，深夜，コウモリやモグラの歓迎を受けたり，珍しいチョウを追いかけたり，スズメバチの巣をホテルの軒下に見つけて悦に入ったり，はじめての海外旅行を楽しみました。

なかでも収穫は写真の5本足のウシで，クアラルンプールの観光バスでその話を聞きました。5本めの足がどこについているのか想像もつかず，ただ歩きにくいことだろうと思うばかりでしたが，実物に接してみると，なんと背中からはえているではありませんか。ほら穴の登り口に飼われて，ゆうゆうと草を食べているところをとりました。■

（池田市・沢田　久・36歳・会社員）



裏表紙説明

キアゲハ　春の野にひらひらと舞い，ひとしきりはねを休めて風にただよい，またひらひらと舞い上がる大きなチョウだ。黄と黒にいろどられたはね，へりがのこぎり状にふちどられ，長さ1センチに達する尾状突起をもった後ろばねが特徴だが，こうした美しさを守るためにはひときわ用心深い。はねをひろげ，眠ったように花から蜜を吸うときも，すぐ飛び立てる身構えを忘れてはいない。

幼虫はニンジン，ウイキョウなど，セリ科植物を食べ，驚くと頭の後ろからくさい黄色い角を出す。キアゲハはヨーロッパではアゲハチョウ科の数少ない代表の1つであるが，日本ではアゲハチョウ，クロアゲハなど仲間も多い。■

（日高敏隆）

PH. JACQUES SIX

創刊記念〈愛育の記〉募集

動物の飼育，観察をはじめ，人と動物との交流の記録などを募集します。

形式は自由ですが，400字詰原稿用紙30枚程度にまとめてください。

1.個人の部（共同研究などをふくむ）
A小学生 B中学生 最優秀作各1編・奨学金（各10万円）優秀作各5編・奨学金（各2万円）C一般 最優秀作1編10万円 優秀作5編・各2万円。

2.学校の部 A小学校 B中学校 最優秀各1校・理科用具（各20万円相当）優秀各5校・理科用具（各5万円相当）

▶締切り・応募方法 昭和46年12月31日必着。第1ページに住所，氏名（学校の部は学校名と指導教諭名）を明記。

▶問合せと送り先
朝日新聞社「世界動物百科」愛育の記係

原稿募集

読者の研究——動物の採集，分布，飼育，観察などの研究報告。

仲間のひろば——本誌への要望，動物界への意見，主張。または自然保護に関する各地の現況，対策など。

動物ニュース——学会，同好会，動物施設，飼育などに関する珍しいニュース。

ペット相談室——ペットの飼育法，病気，購入などに関する質問。

動物写真——あなたが撮影したもの，または秘蔵の動物写真。（撮影の場所，年月日，データをつけてください）

原稿の枚数は，いずれも原則として400字詰原稿用紙2枚以内。

原稿には必ず住所，氏名，年齢，職業，電話番号をお書きください。

採用分には薄謝または記念品を進呈いたします。なお，お送りくださった原稿，写真はお返しいたしません。

送り先は，
東京都千代田区有楽町2-3（〒100）
朝日新聞東京本社
「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係



獅子門

ミュケーナイ（ギリシャ）
紀元前1250年ごろ
彫刻の大きさ
290×366センチ
石灰岩

「獅子門」の名で知られるこの石の彫刻は、ミュケーナイの城塞の北西部、最初の入口の楣の上にある。ミュケーナイの建築は、粗く切り出した石を積み重ねたもので、この入口は、太い石の柱を２本たて、その上に大きな石を梁のようにわたしただけの単純なもので、その横石（これを楣という）の上に、つまり入口の真上に、この獅子の浮彫りをほどこした石が置かれているのである。

２頭の獅子は、１本の円柱を左右からはさむような具合に対象的に彫り出され、いずれも、前脚を円柱の載っている基壇の上にかけて、天を仰いでいる。真中の円柱は、神殿をあらわすものであろうから、この２頭の獅子は、聖なる場所を守護するという意味を持っているのであろう。城塞の一番最初の門にこのような彫刻が置かれたのも、十分うなずける話である。

しかし、それにしては、何と生き生きとした生命力を持った獅子だろうか。残念なことに、頭部は破壊されてしまっているが、ぐっとはった胸から腰にかけて流れる線は、あふれるような力強さを見せている。全体が巧みに三角形の枠の中に収まるよう考えられているが、獅子の姿そのものは、少しも窮屈な不自然を感じさせない。

今から3000年前の古代人のたくましい造形力が、そのまま現代のわれわれにも伝わって来るようである。■

（高階秀爾）

PRESENT
洩れなく進呈！ ― 豪華プレゼント・サービス

創刊第１号から第10号まで、10号分のＡＬ・シール（各号30ページ）をまとめてお送りください。３つのプレゼントのうちお好きなもの１つをさしあげます。封筒にシール10枚と希望プレゼント名・住所・氏名・年齢・そしてあなたの最も好きな動物名１つを記入した便せんを入れ送料（ⒶⒷ55円Ⓒ35円）を添えて 〒100東京都千代田区有楽町　朝日新聞東京本社「世界動物百科」係へお申込みください。

Ⓐ**ワイドカラー動物ポスター** 石油から生まれた未来の紙―「合成紙」に印刷されたかわいい動物のカラー・ポスター（78×54cm）

Ⓑ**ワイドカラー・世界動物地図** 同じく「合成紙」に印刷されたカラー地図。さまざまな動物の生息地がひと目でわかるよう楽しい絵で解説。

Ⓒ**「野鳥の声」ソノシート** 野山にさえずる鳥の声30種以上をおさめた２枚のソノシート。（解説つき）



《特製専用ファイル》

16冊で豪華本1巻になる特製ファイル。毎週号をピンでとじ込んでください。「世界動物百科」が全12巻のすばらしい豪華本になります。お近くの書店・朝日新聞販売店でおもとめください。

定価600円

世界動物百科　通巻8号　昭和46年5月２日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



キアゲハ　説明 30ページ

雑誌コード　0631